

增補雅言集臨見

五十四

813.6

I 6199

Wald





813.6  
I 619g  
Nnd



691370

増補雅言集覽卷之五十四

○比の部 ひえとりトモ云 (著聞) 廿家隆卿ひさうのひよどりせぎのそといふを

**補**ひよどり ひえとりトモ云 (著聞) 廿家隆卿ひさうのひよどりせぎのそといふを

ひよりの (夫) 廿五「むりまぢやをらの日よりまかりぬともおぼしめてむらじと

まりを **補**(月詣) 釋教智俊法師「ひよりにまつうた世此岸のむた守いまぞみのり此舟よそ

ひそる (曾丹集)「むるくとうらくけふりたわねたるあまたひよりのおもてを

くろも (拾愚) 上「待えたる日よりの道をたのみよてむるりまいづる浪の上りか(土

佐日記)ひよりの事うちどりの心あまりせつ てけい

ひよくと (枕) 三八 鶏のひかのあいたりよるうをわいけよきぬみどりなるさま

いでひよくと とかいがましくなきて

ひた 引板ナリ (夫) 十二「終たるまも露やおぼつゝをるらんひたうちもへてまも

る山田を (玉葉) 二 山田よて夜ひこの音をきいて 道命「あゝ引の山田此ひたの音

たぐみ心よもあらぬ糸さめをぞる (家持集) 廿 (夫) 十一 山田もる田もりのひた



心よてこひせるちり此聲ぞとめつる(後) 維一 女のと 「小山田のおとろりいあもこざりしをいとひさふるよけし君哉(源手習) 九 ひたひきならはとおとをうりく(同夕きり) 四 十 こがらりの吹さらひたるよ鹿のさまがまきれもとよたよきみつ山田のひたよもおどろりき色こは稲とも此中よまどりて打あくもうれへ顔なり(久安百首) 季通 秋風のふりぬかぎりひひとりもる山田のひたよいとまなきりか(万八) 五 「衣手あみいぶつく迄うゑし田をひきた我もへ守れるくる(新古) 秋上 俊成 「みいぶつは植し山田よひたもへて又袖ぬらは秋の來よけり(伊勢集) 廿 「ひたもへてもるつなをのこひく時のいなばよ露ぞとまらざりける(草庵集) 「ありきのとさくともをらむひたもへていねもるを田のさをしりの聲○信友云ひたトヨミナレタレト光明峯寺攝政哥合ニ行能 「足曳の山田よあらむひたち帯りりよもどけぬ契なりけり○ひたスミテ唱フベキヨミザマ也イヒカケハ清濁ニカハハラザル例ナレドカクコトサラニヨミカケタルニたヲ濁聲ナラバカクハヨマルマジキ也此本書ニ引タル哥ニモ必ヒタハ清ベキヨミザマナリ(更科日記)田といふものひたひきあらはれおどろるかりのこちして○山家集下よ「まきこは月の氷をうたぐひてひのてまえるあぢのむら鳥此ひのてひひのてト書タルヲヨミ誤タルニテひたの

手ナランカサヲバひたの手ニテひとの繩ナルベシ同集「遠くさはひたれおもてよ引汐ハ沈むどころぞりなりかりける○是ハイハユル水牌ニテ海潮ニテナラス引板ヲヨメリトキユニ(新續古) 秋下 花山 院御製 「山田もる人といかよひたもへてときぞともかく物をこそおもへ

○ひたのを(夫) 十二作 者不知 「あし引の山田よりるひたれをのたゞひとをぢよ人ぞこひさ

○ひたのかけな(夫) 卅三 衣笠 内大臣 「秋田もるひたれけけ繩打もへてたゆまを人をこふるころ哉(新後拾) 戀四 秀 胤法師 「小山田のひたれけけあまたえよりおどろりはべきたよりたよか(玉葉) 雜一 宣方 「秋もつるひたれかけなを引すてのこる田面のい

ひたちおび 常陸帯 (六帖) 五 (新古) 戀一 下 八 「あづまぢみちのそてなるひたちおびのかとばかりもあひみてしうな○俊頼抄ニひたちの國よ鹿島の明神と申神の

祭れ日女のけさうあまたあるときよ名どもを布の帯あかたつけて 云 備 (万代) 戀二 家隆

「めぐりあせん契もいらぬ常陸帯のひたみちあのみこひやこたらん

ひたりみぎ 左右 (源空蟬) 二十 ひたり右よくるくおもへど(同 すま 卅 六 「ういとのみ



ひとへは物のおもふえでひたり右よもぬる、袖哉(同 楨柱) 三おとゞたちもひたり  
右よき、おやさん事をとゞりてかん(順朝臣家馬毛歌合) 番外「左右くらぶるう  
ま此あしとやみとが、たようつかちふちをみよ(伊勢亭子院哥合日記)かむたちへ  
の階のひたりみぎりみみな分てさむらひ給ふ〇是ハヒダリミギリト云リ

ひたりみだの御まかま(榮さま) 三さるゝ入道殿の有國惟仲をバひたり右の御  
まなこと仰られけるをさめられ奉りぬるよやといと不いけかり

左も右も(榮月の宴) 廿宮たち皆さまと、うつくしういづ方よもおそしませを上左  
も右もとぞおやめさるゝがうちよも猶宮の御方のみこたちいいと心ことよおや  
しめれ(新六) 四家 「戀しさもつらさも袖をかみためて左右あもくちぬべきりな

ひたる浸 詞花 雜上 實業 「住吉の波よひたれる松よりも神のゑるゝぞあらわれよける  
補 拾 雜上 松のうみよひたりさる所を伊勢(狹) 三 下 十一 こがねのいさこよ白かねの浪

よせてひたれる松のふりみどりの心をへをぞ 云々 (堀百) 夏「五月雨の日數ふれど  
もこのべれ大江の岸ひたらしりけり(伊勢集)「波よのちひたれる松れふり  
どりいくしそとりのいさるべかるらん

ひたらく 日高 (源わか紫) 四十 日さうろおるとのもりおきて(同 とつね) 九 そら

ねとつゝ日高くおるとのもりおきとり(同 若紫) 三 加持など参るると日高くさ  
しあがりぬ(同 初音) 十 おとゞの君をこしおるとのもりて日高くおれ給へり(狹)  
四 中 一日たらくあるまでおるとのもりたる補 (兼盛集)「ちら雲の山へそるりよ  
さこゆるをさとり日たかくいでこちをする

ひたれ(宇治拾) 卅一 糸どころとおやき所は五位入てねんとそるよ綿四五寸む  
がりあるひたれあり 云々 終りいろのさぬ三がうへは此ひたれひきゝてふいた  
る心いまたあらぬぬぬ氣もあけつべし(忠見集)ひたれとらせんとそれどうらな  
んかだといふ人は「すみよしの死しともいそ沖つ浪なちりけようらひなく  
とも(後) 雜一 作者元輔として此哥有(爲家抄) 六 ひたれいとのゑものなり(十訓抄)  
九 大臣公卿も胡服として我國のともがら此ひたれのやうかる物を着て (台記) 仁  
平元年 別記云次召家行朝臣於對東孫庇南第五間簾前使隆長賜比多々禮(櫻萌) 仰之路

頭定有寒氣以之禦寒家行進庭中再拜退出(兵範記) 保元三年二月五日 云々 今夜執聲  
事蜜々營之 云々 男女相伴被入帳中下官覆衾 直垂

ひたれ(源 須磨) 初 あまれ家たみまれよかき聞給へど人なげくひさへけたらんを  
まひいいと不いかりるべし(紫日記) 下 などの必しもおもよくひき入ららんがか



「こりらん又などてひた、けてさまよひさし出べきぞ(太平記) 卅常の隠家を替ん  
 ともお給をせまこひた、けたる式にて其方さまの草のゆりりまでも心おくべき  
 ことゞもい露斗もおもひ給をせ<sup>補</sup>春海がとせがたりふ云ひた、けいひたをらた  
 けたる意又よたけといふ詞あるも世よたけたる意あるべしやんぞとなん人の事を  
 御身のそとれよたけさかど源氏おえたり廣足云よさけいひた、けいひたことあり  
 上の部見るべし(玉小櫛) 二云とりしまりなくさつといたるといふこと也叩字滔、  
 字なども其意にてりかへり人しげくまぎと、し死心といふのみたり也(源若菜)上、  
 三このたいをのみなんこれをぞおいらりある人といふべりりけるとおん思ひ侍る  
 よしとて又あまりひた、けてされもしけなれもいとくちをしやとさりりの給ふよ  
 ひたう 非道(落くち) 二中納言いこれより外し領すべき人なれをかくるることい  
 とひたうなることゝこそ給ふかりし(源行幸) 八内侍のかみありばなまがしら  
 こそのぞまんとおもふをひたうよもおせしかけ、るりな(落窪) 四我親のひたうよ  
 はらたち給ふこそ物いふりひかけれとおもひて  
 ひたのたくみ(源東屋) 六やりどいふものさしていさへり明たればひたれたくみ  
 もうらめいきへどてりか(万) 十一(拾) 戀五 「とりくし物のおもせむひど、くみ  
 人の(万) 九

うつそみなそのたゞひとせぢよ(延喜式) 卅民部省 卅凡飛驒國毎年貢工百人其返抄  
 准諸國調庸例凡飛驒匠丁役中身死者勿貢其代役畢還國者免當年徭役(日本紀竟宴  
 歌) 二琴の音れあそれれをやすめらきみひたれたくみれつみをゆるせり(万代) 三  
 惠慶 「まがれをるひたれたくみのたつきおとあなりしがましなぞや世中(拾) 戀  
 法師 三  
 くよ 「宮つくるひたれたくみげてをれおとほとくしりるめをもみし哉(御堂集)  
 もち 三  
 「ことつくるひたのたくみのなりせむあし、つけてり雲路をらまし  
 補ひど、くみ(新六) 五 知家 「ひとせぢよこひやわたらんひた、くもつそみおその  
 あとおまらせて(万代) 雜上 一かさみよもかしてむりしひた、くみちらぬさく  
 らをつくらざりけん(御堂集) 「おもふこといつといひへさひた、くもこまりよつ  
 くるものからめや  
 ひたおもむき(源楨柱) 八 なさけくしき心うちまとりたる人こそとさまかうさま  
 よつけても人れたためえぢがましからんことをおしむりり思ふところもありけれ  
 ひさおもむれすし、み給へる御心よて人の御心動きぬべきことおそりり(同 東や)  
 七このいといふりひかくなさけかくさまあしき人なれどひたおもむきよふた心を  
 きをみれば心やすくて(相摸集) 「そつをも何からしけん秋の田れひたおもむ



犯はあらぬものゆゑ(源わか)上ノ。夕霧詞より犯事ひたおもむきおのみやの  
いらへて

ひたおもて(源さか)五十。臘月夜ト源ノ あさましうめさましう心やましけれと

ひたおもてよのいりでりあらせ給せん○宣長云遠慮モナクヒタスラニソレトア  
ラハスナリ(同はし姫)廿九ありうなりゆけささげまひたおもてなる心ちして(同

夕きり)六十からうとてあげがさまりぬりくてのみこといへばひたおもてなる  
べけれバ出給ふとて(とりうへとや)十一あかみトひたおもてよて身をあらぬさ

まよまどらひありくうつ、此ことよはあらざりとおもひつゞくる(同総角)  
七十ひたおもてよのあらぬさひよりつゝ見奉り給へと

日たくる(源タカ)廿ひたくる布とよおき給ひて(同紅葉賀)三日たけておのく  
殿上よまわり給へり(同若紫)四君のおこなひ給ひつゝ日たくるまよいりから

んとおやしたるを(同あふひ)六日たけゆきて(白文)七春風日高睡(齋宮女御集)  
「立くもるさされ河霧されぎのミ日たけぬをらよぞれふるうな(朝光卿集)日た

くれバきえやいぬらんうたうたの花のう布をも今朝見るうを(玉葉)戀二「白露  
の日たくるまよきえゆけくれまつわれもいかゞとぞおもふ  
朝光

ひた紅(六帖)五「誰ま紅なれば三輪山をひたくれなるあゝ布せせるらん

ひたやでもり(空穂 俊隆)八ちぎりふりくひ又もまわりきなんけふの御供よさふ  
らひつればひたやでもりなりとてりへり給はんびんかりるべしとて立給ふ程おこ

の猿六七ひきつれてさまよのの葉をくやてみさして(云蜻蛉日記)中をさか  
泥人のひたやでもりからんせうをこきこえよとてものするよつれたり(源帚木)廿

えんがるうたもよまきけしきさめるせうをこもせひたやでもりあさけかりり  
いりバ(同すま)十源紫 = かく世をさるゝきこひのころぐるしき事のおのづか

らおやりりけるをひたやでもりよてやの(同總角)廿六宮をば御馬あてくらさまたれ  
よおとしまさせ給ふて辨めいいでゝこゝもとよさゝ一言聞えさげべきことなん侍

るをおやしとなつさまみ奉りてしよいとまづりしけれひたやでもりあていえや  
むまどきを今をさしふりてをありしさまよのみちひき給ひてんやあど云々(同

夕霧)卅。夕霧文いとめづらむき御ふみをかたゝうれしう見給ふるあこの御とが  
めをかんいりよきこしめしたる事あり一秋の、此草のしけみのさけしりどかりね

のまくらむすびやいせしあはらめ聞えさけるもあやなけれとよべのつみのひたや  
でもりあやとあり○宣長云然ル故ヲ何トモイハズ只オシユメテヒタスラニ引籠ル



心ノ詞ニテヨロヅノヲニ其意用ル詞也コ、ハヨベノ我ニオフセ玉フ罪ハ事ノサマ  
ナモヨク尋子玉ハデタマヒタスラニオシコメテ罪ニナシ玉フニヤトイフ也(和泉  
式部集)上「うれよのみひさやでもりとおもへどもあふみの海のうちいで、みよ○  
眞淵云ヒタスラニ打コメテトイフ語ト見ユ(狹)四下大うたあつけてもいまのい  
とかうしもひたやでもりよなさけなくやのもてなく給ふべきと

ひたまひのふた日給(うつろ)初秋)下ノひたまひのふたは内侍のりみおあはしり  
の札(うつろ)八十りせ給ひて

ひたふる(源玉葛)十海賊のひたふるからんよりも(同蓬生)廿ひたふるよものつ、

みしたるけとひのさすがあてやうかるもこゝろおく、覺されて○契沖云日本紀  
ニ永ノ字頓ノ字チカケリ永ヲヒタスラトモヨミタレバ同シ心也(源桐つは)九今ハ

な犯人とひたふるよおもひかりかんと(同は、き、)十九ひたふるよこめきてや  
もらうからん人を云々(後)雜三「うけれどもうかきものをはたふるよこれをや  
人のおもひまつらん(同)雜一、女「小山田のおどろりよもこざりしをいとひたふ

るよよけしきみ哉(兼盛集)九「ひたふるよいひもなさてそよふれを人よくから  
ぬものどこをさけ(六帖)五、「あーび泥の山田はひたのひたふるよをさる、人をあ

どろりぬりな(同)五、「ひさふるよけをさけな、ん露れみの玉とひなしよおきまど  
ふらん(拾)戀五よみ「ひたふるよいなる何うのさもあらばあれいきてかひなきも  
のおもふ身の(伊勢物)十「みよしの、い

よるとおくかる(源夕かほ)六ひたふるよさる物から(同蓬生)十ひたふるよ  
人さろけよいよも、てか聞えト(空穂 嵯峨院)三、七、女御ヲ盗ソ御車のさうわの  
おとゞ大將の御車をひきさらべて御前のきんたち打ちこみておのしませばこゝあ

ういこよひたふるのさうぞくしたるものども打むれつ、あふよるべくてあらねば  
かくれぬ(同末つむ)十あさましう物づ、みと給ふ御こゝろあてひたふるよみもい  
れたまそぬ也けり(神代紀)下七恨言既切(後拾)戀三「あふことのとたゞひたふる

の夢ならさおあトまくらふ又もねをまじ(詞花)雜上「ひたふるよ山田もる身と成  
ぬればこれのそ人をおどろりぬ哉(源淨舟)九人のもどろんもいせんもいられむひ  
さふるよおもひ成またり

ひさふる心(狹)下「源氏の宮ハ云々今ハたおなやかよとあるとひさふる心も出來  
てさるべきひまをみ給へど同心ニサヒカント也(源蓬生)六盗人をとひひさふ  
る心あるものも思ひやりれさびしければなや云々(同あふひ)十うつ、よも似た

る心あるものも思ひやりれさびしければなや云々(同あふひ)十うつ、よも似た

る心あるものも思ひやりれさびしければなや云々(同あふひ)十うつ、よも似た

る心あるものも思ひやりれさびしければなや云々(同あふひ)十うつ、よも似た

る心あるものも思ひやりれさびしければなや云々(同あふひ)十うつ、よも似た



けくいりきひたふる心出来てうちりなぐるおどみえ給ふことたびりさなりよけり  
○ひたふるかる心(源夕霧)六あが君とくおしちてひたふるなる御ころなつ  
ろせ給ひそと手をさる(同わか)十二世ためしあき事も侍らぬをめぐらり  
よあさけな死御心をへからばいとこゝろうくてなりくひたふるかる心もこそつ  
死侍れ

ひた心(蜻蛉日記)中女君子ひたこゝろよなくもかりつべき身をこそよさそり  
て今まであるをいりせんゆるおく實方集のる万代

ひた黄(夫)六衛士がゐるひたさよみゆる花かれバ心れうちよいそでおもふり○  
此哥の圓融院御位の後實方朝臣馬命婦と物語り侍りける所山吹の花を屏風の  
上よりかけこさせ給ひければよみけるよ云々御りへ圓融院「みり死よりやりの  
御製

ひた死花かれバ心とめて折人もあし○是の實方集よもとえて前の歌の作者を  
少將とせりヒタスラ黄ナル花といふ心は火焚をかねていへるかるべし

ひたさ(火燒)鳥名也(夫)廿七「おもひりねいさとりくおる山里を猶さびくとや火さ死  
なくなり

ひたさ(榮)さるのわひし(十)おまへのひたさやをみて肥後「君がため年へてみえ  
命婦

ひた死やのいまの我身のむねをやくりかいては「いつくさかさりとみえしひ  
た死やもけふも心をこがけなりけりさいわんの「いりよせん衛士のたくひもさえ  
そて、なが死おもひよえぬべき身を(源)四ひたさやりけりよひりて人けす  
くかくしめふとして(細)東宮よもあり所用不分明野宮の神膳の用かるべし火  
炬小人二人山城葛野郡秦氏の童女を取のよ延喜式云々神供かど忘たゝむる所歎  
云々(花)同(コレ式五)ニミエタリ新造ノ炊殿忌火庭火祭の條ナリコレハ炊殿トア  
レバ火たさやトハ別カ(江次第)廿二元日宴會撤去東西火炬屋東置日華門北掖西置  
紫宸殿西掖主殿察又  
役之(和名)十二辨色立成云助鋪和名一云比太如衛士屋也(同)廿五左右衛士云々取  
薪置南北炬屋主殿察入燃庭火(榮)か、やく(藤壺)十ふちつがの御ちつらひ云々火た死やつ  
ちとりと殿の御まへありしそより死たるやうなりしをこのおまへよてのまた今  
すこしけしきことかる心ちれるもうちつけのめなるべし(同日蔭のあつら)廿七おま  
へよひたさやりきをえて大床子をそののけしひ(後拾)三小一條院東宮ときこ  
えけるときおもてぎし位おり給ひけるおひと死やかどとちささくを見てもみ侍  
ける堀川一雲るまでたちのするべきけふりくとそえし思ひのやりよもある哉(更  
科日記)上さけ志とといふ寺あり云々 是のいよへたけ志とといふさがり國人



のありけるを火たれやのひたく衛士よさし奉りたりけるは御前の庭をそくとて云  
それより後火たれやよ女いゝるかりとかたる(後拾)哀十月さうり物へまうりけ  
る道お一條院をそくとて車を引いきて見侍りければひたれやをその侍りたるをみ  
てよめる赤染 衛門「死えよける衛士のたく火のあとを見て煙とかりし君ぞ悲しき(榮  
日蔭)十 御前ひたれやをそ陣屋つくり吉上のこととくしけよいひおもひたるけ  
しきより事おこりてさふらひの長ともなさせ給ひさまとくことくしけよみえた  
り〇和歌色葉集よ内裏よ夕ぐれよなれば火焼屋といふもの、中おあやしき男の火  
をたく也それを衛士といふ歟

**ひたみち**(源 御法)廿 今のちちの露もこととくおまぎるまどく後れよをとひたみ  
ちおおぞしたつこととゆみなし(同 浮舟)六みやをいとくめできこゆる心かれバ  
ひたみちよいふ(狭)三ノ下「行りへりたゞひたみちよまどひつゝ身ハ中空おなり  
ねとやさし(源 柳)初 万のあそれをおぞして、ひたみちお出たち給ふ(空穂 俊蔭)  
二六ひたみちなる行ひおおもひかりなんこそうれしからめどうぞれけもなけれバ  
(源 手習)四十 また行されとすけなる御ぞよいりでりのひたみちよありのおぞし  
たらん(榮 月の宴)十 御どのいれどもひたみちよみぞめ也(夫)卅六西宮「ひたみ  
ち

ちおたのめバ人のつらくともあらぬがすおてあらんとぞおもふ(榮 玉のあさり)十  
しろき御ぞふたつみつたてまつりさるお御いろも同トやうにてたゞひたみちあ  
ろうおいしにして(源 さかさ)六ひたみちおおぞしつことおもやとさけがよくるし  
うおぞさるべし(和泉式部續集)(万代)三「いとゞくどゞめがたれひたみちれ  
をしまれぬ身のなみたかりけり(源 若菜)上ノ 姫宮のけよまたいとちひさくらたお  
りおおぞるうちおもいといたけおれ御けしきてひたみちあわらび給へり(孟)  
女三八一向ニオトナシキサマノナキ也(和泉式部集)下「おもひやる心ハたちもお  
くれトをたゞひたみちのけふりとやみし(榮 楚王夢)卅 あさましうおくれ奉りぬる  
事とひたみちよかなしう(相摸集)「ひたみちよおもひ入しうたなれどまどと  
ざるべきしるしをぞまつ(万代)戀二「めぐりあそん契もいらぬひさち帯のひたみ  
ちよのみこひやたらん  
**ひた白**(空穂 藏開)下四 顔りたち鬼のこくとくして頭ハひた白し腰ハふたへある女お  
れと

**ひたひ**(朗詠)無常 觀身岸額離根草論命江頭不繫舟(枕)三ノいつまぞ草ハおふる所  
いとそりかくあそれかり岸のひたひよりもこれにくづきやをけ也(顯季集)「おみ



りくるまゝのひたひじめなれ木のめかれて妹とぬるよしもがな

ひたひ(新古)下雑后ふたち給ひける時冷泉院の后宫の御ひたひを奉り給ひけるを出

家のときりへ奉り給ふとて東三「そのりみの玉れりさしとうちりへ今ころ

も此うらをたのまん〇玉のりさしひたひとて女房の装束のときりみあけとてお

りひかづらのやうおぼるもの也

ひたひひてをあて、(源玉葛)四ひたひ手をあて、ねんどいりてをり(土佐日記)

下風波アシキナ越テ女おきなひたひ手をあて、よろこぶ事ふたつなり(源手習)

四十尼君云々ひたひ手をあて、あやしこれいたそとさうねけなる聲よてみおこ

せたる圃榮鶴の林十よるひるひたひ手をあて、ねんど奉りたり

額をあこせて(竹取)下りのつりさ此官人くらつ丸と申を翁申やう子安の貝とらん

とおぞめさばたさりり申さんとて御前ままりたれば中納言ひたひをあこせて

むりひ給へり

ひたひがみ額髪源帚木三みづからひたひがみをか死さぐりて(同朝前)九まろ

がれさる御ひたひがみ(とりかへそや)一御額がみも汗まろがれてささとひねり

りけたるやうよこぞれりりつ(源あふひ)六あせまおひたしてひたひがみ

もいたうぬれ給へり(同)十一とかが死人もひたひがみのさこみどりくてぞあめ

るを(同若菜)上八哀れとおぞして御ひたひがみのやうくぬれゆく御をばめ(同

夕霧)二御ひたひがみのぬれまろがれたるひさつくろひ(頼政集)下七「妹ならバひ

たひのりみをふりりけてつたふかみたを玉とぬりま

ひたひつき(源夕顔)初をりさひたひつきのさきりけあまたみえて(同空蟬)四か

いらつきひたひつき物あざやり(同末摘)三櫛おいたれてさしたるひたひつき内

教房の内侍所のそまかゝるものさもの云々(枕)一、そのさたりまとりむらひた

ひつきいとうつくうてとびあるくいとをり

ひたひのさみ(堀次)老人「いやまゝひたひのなみひりれども消せもとのゆ

きつもるりな

額おあけて(源手習)五あやのさままひたひおあけて出きたり

ひたもの(枕)四九。雪山これあろからん所ひたものいれてもてこきたなけから

んひり死すて、などいひく、めてやりたれば云々

ひたを(源あふひ)六御ふはまをひさやり給へればあせまおひたしてひたひ

がみもいたうぬれたまへり



ひたす (安康紀) 十常養宮中 ○コレハ古言ニテ中世ニハ用井又詞ナリ

ひたすら (和泉式部續集) 下 「ともをれば引おどろりは小山田のひたをらいぬぬあ

き此よか〜 (清正集) 二 「秋のたれひたをらよこそおもひつれりよと人よみえ

よけるりか (元輔集) 五 「う〜といひて世をひたすらよそむりねばものおもひ〜ら

ぬ身とやかりなん (源 帚木) 十 ひたをらよ〜ともおもひをなれぬをどこ聞つけて

(同 松風) 三云 々 いとあひれかれバひたをらよもえうらみそむりぎ (神代紀) 上三 我今

當永去 (後) 八しらす 「ひたをらよわがおもそかくおのれさへり〜とれみ

鳴こさるらん (後拾) 泉式部 「ひたをらよ軒のあやめ此つく〜とおもへバ孫のみ

かゝる袖哉 (同) 同 「さま〜よおもふ心のあるものをお〜ひたをらよぬる、袖哉

(新後撰) 秋下 教定 「露結お門田のを〜ねひたをらよ月もるよと、孫られや〜る (夫)

七 俊成 「伏見津や澤田の早苗とる田子の袖もひたをらみ〜ぶつくらん (待賢門院堀川

集) ひたをらよ思ひ絶よ〜山川のあとみづららとおどろり〜けん (玉葉) 雜三 一い

るむすふ秋は山田のひたすらい〜とへやこれのかりそめのよぞ (千載) 戀二 一ひた

すらお恨〜もせとさき世よあふまでこそちぎらざりけめ (源 夕のほ) 五十一 逢

までのかたみさりとみ〜をどあひたをら袖のくちあけるりな

ひれ 領巾 (和名) 十九 領布 日本紀私婦人項上飭也 (枕) 五 五月のせち此あやめ藏人さ

うぶのかづらありひものいろよ〜あらぬをひれくたいをど〜 (同) 六 御てうつ

さんのおねあををそのもからぎぬくんといひれなと〜 (古事記) 下も、〜き

此大宮人の鶉鳥比禮登理加氣豆 云々 ○鶉のふの肩より胸まであるを領巾うけたる

さまよ喩へての給へり (雅亮裝束抄) かぐみまもりひれあせ〜をひ (同) 云々

まづひれをくくひれくたひえといひれ (万) あまひれ〜くひれあまつひれひれり

〜くうなかけるひれ

補 びれうの車 (宇治拾) 卅四 日の裝束うほ〜く〜てびれうの車よのりて

補 びれふる (鱈 夫) 廿七 光俊 「水ぶねよう死てひれふるいけをひのいれちまつまもせそ

いなによや (公朝集) 一 小車のこたちの水はかれ〜よひれふる魚のそれをよさふ

り (夫) 廿七 信實 「こたまとるみなとのふねの鯉をせまひれのささぎの波たりく〜ゆ

ひれふ〜 (源 さかさ) 廿四 あさまらうむくつけう覺されてやがてひれふ〜給へり (枕)

一ノ犬 所 さの翁丸といふよひれふ〜ていみどくなく (源 總角) 廿五 心つきかくおぞ

てひれふ〜たまへり (宇治拾) 十九 孫この孫をみをうり〜ふやうよひれふ〜て志

さ〜さりありて



ひそり(土佐日記)上ある人の子れこらひあるひそりいふまろ此哥のうへーせん

といふ(同)下さく人の思へるやうかそたゞことなるといそりいふべし

ひそむ(落く)四たゞひそみよひそみて(源 夕のほ)五みづらひそみ御らんせら

れ給ふとつきしろひめぐそれ(同 わけまき)九四十あやしくひぐくくもてなうた

まふともしくちひそみきこゆ(同 東や)五十十うかしくみ奉るまごひそみよひそ

む(遊仙窟)笑臉特宜(万)四五百年爾老舌出而與余牟友吾者不厭戀者益友トイフ

ヲ(六帖)ニおうかノ題ニおいちひそみなりぬともこれのこれト引直シテ入

タリ(榮月の宴)五十。八宮ノ只此宮をぞもてこらひぐさお奉り給ひけれバとも

それバうちひそみたまふをいとゞをこがましき事ヲ笑ひ奉り給へる(源 玉葛)

九十いたうかいひそめてりたみよ心づりひたり(同 柏木)三十九めもみえやとおし

志なりつゝみ給うちひそみつゝ見給ふ御さま

ひそまる(土佐日記)上こゝちあしくしてものもものしたままでひそまりぬ

ひそく秘色(源末摘)廿二みたいひそくやうのもろこゝのもれかれど〇契沖云五雜俎

云陶器柴窑最古也中略世傳柴世宗時燒造所司請其色御批云雨過青天雲破處這般顔色

做將來然唐時已有秘色陸龜蒙詩九天風露越窑開奪得千峯秘色來云扱此秘色の飯な

どもる器也

補ひそくのかりぎぬ(雅亮裝束抄)うはいろいろなりこれもつねの志ろぬぬよ

とおもふをりくれかるやまおきまたつねのことなり秋のひそくようはあをうらつ

けてこくりいろとておとなしき人のさるなりこれらの五位のみなきるもの也〇首

書ひそくいなや一日のそれよさるいろかりそのちのけあてもきてんこれああら

せしてとドめより志ろきぬかどよのきせ

ひつ(更科日記)下源氏の五十余卷ひつよ入ながら在中將と布きみせり川志らゝあ

さうづかといふものぐたりどもひとふくろとり入てえてりへるこゝちのうれしさ

ぞいみトきや(源松風)卅二きぬびつふさりけよてあるを

ひづ秀也(字鏡)聳比豆(靈異記)秀備伊豆

ひづ(古)夏よみ人一聲のしてなみたひみえぬをとゞぎはわがころもでのひづをか

らん(貫之集)四一みかりみよひちてさけれとさくの花うつろふかけのなげれざ

りけり(古)春上(六帖)朗一そでひちてむすび水のことれるをさるたつけふの

風やとくらん(古)戀三一あさみこそ袖のひづらめ涙川身さへかぐるときりわたの

まむ(万)十一一こぎもこがこれをおくるとしうたへの袖漬左右よなれおもるゆ



補(万)十五長哥朝つゆおものすをひづちゆふざりみ衣手ぬれて(金葉)春信「池よ  
ひづ松れまひ枝まむらさ泥のあみをりかくる藤さ泥みけり(万)二長哥云々朝露お  
玉藻のひづち夕霧ま衣ぬれて(同)十三こひまろびひづちなけども(同)十七春雨  
まおろひひづちてりよふらむ(同)九十二「こぎも子がありもひづちてうろゑ田をか  
りてをさめむくらな一のたま(同)四十三「あひ思もぬ人をなもと白搦の袖ひづま  
でよ絲のみかりも

○(ひち)拾戀四よみ「さをしり此つめたまひぢぬ山川のあさまさままでととぬ君  
哉(伊勢集)廿「秋の野まさまとけしあさ此袖よりもあそでぬるよぞひちまさりけ  
る(新六)五行家「おのづからいくよをふともたまくら此ありぬ契まひぢやくたさん

補(山家)「をみかへ池のさ波み枝ひぢて物思ふ袖ぬるゝがなる(貫之集)菊  
の花ひぢてなぐるゝ水まさまへ浪のしをせやどみざりける(古)戀三と「つれと  
のかぐめおまさるをみた川袖のみひぢてあふよしもな

○(ひて)土佐日記下「手をひてゝさむさもあらぬいづとよぞくむともならまひ  
ころへよける  
日ついで(源藤袴)五御ふくもこの月まぬげせ給ふべきを日ついでなんよろか

らざりける十三日よりそらへ出させ給ふべきよの給もせつ(榮御着裳)八三日の  
おそいませすべけれどもひついでのおしければ二日のよざりりへらせ給へ(同)楚  
王夢十大宮こそとりあつりひまこえ給べけれどひついでなどえりてとかりけり  
(狭)四、中五「まそりあるやうおとおもひ給へりどとみま日ついでもよろからず  
侍りりくばよべかんこの侍る所よこたし聞えさせて云々(源もふ霧)八けふよ  
りのち日ついでありりけりなど人ぎまの給ひて

ひつち(古)秋下よみ「かれる田まおふるひつちれよいでぬのよを今さらまあま  
まてぬど(後)秋上よみ「こゝろもておふる山田のひつちせのきまもらねどか  
る人もお(和名)十七魯音呂於路賀於自生稻也(山家)下「うづらふんかり田のひ  
つち思ひいでゝそのりよてらば三日月のりけ(万代)高遠「小山田のかりその稻の

ひつちさら長くもあらぬ世を歎くり(好忠集)「わが宿の門田のせせれひつちを  
を見るよつけてぞ親のこひさ

びづらゆふ(榮玉村菊)廿御をくるゝ大極殿まさらせ給へるよ御びづらゆもせ給  
へるよといみとろうつくしきものゝめでたくおそいま(源桐つは)廿七みづらゆひ  
給へるつらつきかそのおろひさまりへ給もんことをしけなり(河)さらハ装束の時



あけま死とてみづらゆふもの也(和名)三和名美豆良鬘髮也(宇治拾)廿一うつくし  
けかるこらのひづらゆひさるが

ひつき(夫)五顯輔一みくりするたりのを山に立雉やきみかちとせのひつきかるらん

(拾)賀元輔「朝またさけりふのをうまたつきたの千代のひつれれとめなりけり○  
日次の毎日進る物の事也つきの清て讀きたれり(新後撰)夏「道のべに山田の  
みしめ引もへてながきひつきの早苗とるかり(兼盛集)廿一「万代をもちぞさきえん  
あふみなるおももの、瀆の海士比ひつきの(拾)大嘗會と、こるる時もあるトな 下同  
(兼盛集)「ひつき物たえをさふるあづまぢのせたれ長橋音もとゞろよ

ひつき(櫃)榮(楚王夢)十四さてひつきまいれ奉りてふたりためかど奉るぞのおも  
ひやるべし(宇治拾)三ノ志たし人々ちりくて見んとてよりてみればひつきよ  
りいで、又つま戸ぐちまふたり

羊のあゆみ(新古)釋教「極樂へまたこが心ゆきつりせひつとれあゆみ志さしとゞ  
まれ(千載)誹諧 山寺まもうでたりける時貝ふきけるを死してよめる 赤染「けふも  
また午のりひこそふれつかれひつとれのあゆみちりづれぬらん(拾愚)上「不ぞもな  
くくる、ひりけし終をぞかくひつとれあゆみきくよつけても(摩耶經)偈云譬如旃

陀羅驅羊就屠所歩々近死地人命復過是(新六)一(夫)十九「もえつゞく香のけふり  
のと死うつりひつとれのあゆみけふも程なく(新後拾)雜下「終よゆくみちもいまそ  
の時かれやひつとれのあゆみ身まぞちりたく(狹)二上かくなぐらいまのまあきえ入  
りなせやとおせしいるけふや常よりいとなやましくくれゆくを羊のあゆみれこ  
こちして(源 浮舟)七十ひつとれのあゆみよりもぞなきこ、ちれ(賴政集)下二「よ  
こりゆくひつとれのあゆみちりけれはいそぎ入ぬる道とあらなん

ひつとさる(遊仙窟)一金城西南(宇治拾)七、これよりひつとさるのりたし山あり  
(夫)十九「みちのくれをら川こえてこられしひつとさるく、ゆけどとるけし  
ひねり(榮 歌合)十 殿の女房の装束のうけものをおそしこまていろく、あてひ  
ねりかさ終さり(源 手習)六十もれをいどうつくくひねらせ給へばとてこうちれ  
のひとへたてまつるを(小野宮年中行事)二月三日云紙平比禰利天(万)九ノ燒太  
刀乃手預押禰利ノ誤(源とて夏)廿。ウツ所 御返しや、とどうをひねりつ、  
とみよもうちいでせ

ひねりいざ(土佐日記)下歌云々きく人のおもへるやうなぞさることあるとひそ  
りよいふべし船君のからくしてひねりいたしてよとおもへることをえしもこそ



去ひへとてつゝめきてやとぬ(同)下あやしけうたひねりいたせり

ひねりいたして(源 夕霧)廿九書さしておしひねりて出給ひて

補ひねりいれて(宇治拾)十一、とやうまめやうものを下のふくろへひねり入て

ひねりかさね(新六)五(夫)九光俊「よをやをみたみのとづらひかへりきてひねりか

さ終りさる人もあー

補ひねりぶみ(書紀)通證訓短籍ヒナノミ

ひねらせ(源 わけまき)卅七こととりのかへそと聞えさせてもあまりあらばつみも

ひねらせ給へ(同 手習)六十物をいとうつくしくひねらせたまへばとてこうちきの

ひとへ奉るを(落く布)一ものぬふことをあらひけれどいとをうけまひねりぬひ

給ひければ(紫日記)五十あてきぐぬふものゝりさねひねりをへなぞつくつくとと

しるたるよ

ひねも(土佐日記)ひねもまなみ風たゝせ(拾)冬よみ人「ひねもはまみれども

ありぬもみぢさのいりなる山此あらゝるらん(六帖)二「もみぢさみ君よおくれ

てひねもはあおもぬ山をおもひつるらな(万代)(玉葉)四「ひねもはあふるそ

るさめいよしへをこふるたもとのづくあるらん(源 わかし)七 ひねもはあいり

もみつる風のささぎあ(同 わけまき)九十ひねもすあながめくらして(和泉式部集)

上「ひねもをあなけうととたああるものをよるのまどろむ夢もみてう(更科日

記) 四十「みやこあなまつらんものを時鳥けふひねもをあなけくらをりな(伊勢

物) 八十四 雪こやがごとふりてひねもすよやませ(万)九終日かけときよ

(大和物)二「こりるべきこともあるものをひねもすよまつとてさへもなけだつる

うを(万)十八「をふのさだこぎたもとやりひねもをよ見ともあくべきうらよあら

かくよ

ひねも(竹取)上ひねもみのかむころもといふなるものりひておこせよとて(源

繪合) 十ひねもみのおもひりた時よきえたるもいとあへな

ひか(古事記)下九 志づえの比那をおへり(万)六あまさりる夷部ヒナベままり(同)

五ノ「あまさりるひなよ五とせままひつゝみやこのてぶりわすらえまけり

ひな(雛)拾(物名)よみ「どりの子へまたひなゝがらたちていぬりひのみゆるはをも

りかりけり(枕)八、鶏のひかのあゝさうまろろをうけよ

補ひなどり(元真集)「雲るよも今のまつらんあゝべあるこゑふりたつる鶴のひな



ひかたがこり(著聞)廿七あるるなり人京上して侍けるが宿までひなたがこりして  
ゐたりけるお

ひなつがし(夫)十九よみ「あまれむら南よめぐるひなつがしあまの草ともよさ  
とよとへ(太子傳)敏達九年瑩惑星

ひなづる(榮か、やく藤壺)初「ひなづるをやいなひたて、まつがえれかけあすま  
せんことをいぞおもふ

ひなのごがれ(古)雜下「おもひさやひなれごくれよおとろへてあまれなはさた  
さりせんとは源玉島五ひなのごくれよおのくド、ころをやりてぞいひける

ひなのながぢ(万)三ノ十六「あまさるひなれかぢゆこひくれありのどより  
やまとしまみゆ

ひかや(御堂關白集)たつまつのきみれ御もとよりひかやまらせ給ふとて(同)  
ふのとれわりみやの御ひなや云々

ひかぶり(古事記)上、四、云々此哥者夷振也  
ひなび(伊勢物)十四哥さへぞひなびたりける(源東や)二十いとあさましくひなびた  
るりみおて打ゑみつ、きゝるたり(同)三きみまこいひなびてぞあるといきゝたま

へぞ(同末つ)廿三「いよくあやうひなびたるかたりにてみからぬこ、ちぞ  
る(同とこ夏)廿四たぐいとひなびあやうきおも人の中よおひ出給へれば(同東や)十

五いともものつゝまゝくてもたひなびたる心よいらへきこえん事もなくて(同蜻  
蛉)卅ひなびものめでする人よておとろきおくして

ひら(源梅枝)十五白きありきかぞけちえんあるひらの筆とりなすようい給へ  
るさまさへ(孟津)セラハ紙ノ面也(同)十七このみ書給へるひらもあめり(月詣)

雜下、土、佐内侍「ひらごとひひりさめめることのも玉のこゑせたくひとぞみる  
ひら(平)方丈記「家ども大きなるもちひされも云々 さながらひらよたふれたるも  
あり

ひらさり(榮御賀)六とのさら殿上人おんでんのおまへの庭れひらさりよみなつれ  
給へり(源行幸)五上達部のひらさりよ物参り(李部王記)親之公卿着平張座セラハ

タヒラ也タヒラニハル也(和名)十四、周禮ノ注ヲ引テ平帳曰幣和名比良波利トアリ  
今云天幕日オホヒ也(源胡蝶)八こざとひらさりなどもうつされおまへよこたれ

るらうをかくやのさまよして(空穗樓の上)上ノ二、がく人も、まひらさりよあつ  
まりぬと一院御らんとて云々のうたのよきひらさりおつゞみうちてつ

増補雅言集覽 卷之五十四 十五



りよやうくがくしいづ(同)上九いざりのひらさりよいりんと給ひて(大和物)

四此ひらさりの川よのぞみてあたりければ(一)ひらさりよいりんと給ひて(大和物)

ひらがりて(宇治拾)十二、虎人の香をりぎてついひらがりて猫の鼠うかぶふやうよ

てあるを(發心集)八、ある所の築地のつるよひらがり伏せるありけり

**補**ひらがな平假字(空穂藏開)中ノ一、例の女の手ふたくどりよひららななき云

**補**ひらたけ平茸(著聞)十八、九條の太政大臣のもとへひら茸をおくるとて

ひらつら(宇治拾)九、ひらつらなる法師のふとりたるが六十をりかるとて

ひらゝり(落く)一、おもてひらゝりよきたれりたどみえたり

ひらうけ(枕)十六、ひらうけのどやりよやりたるいそれたるのかるふくくみゆ

○檳榔毛ノ車也(延喜内膳式)檳榔葉廿八枚八枚扇涼御飯二十枚雜膳火料(空穂

國讓)下ノよゝあるひらうけの車のすたれをいとたりくあけて

ひらく(繼躰紀)まささくひのいたを飢斯毘羅枳云々(源帚木)四此づいもこ、

ろよくひらくべきとのたまへ(同)夕かほ二、あみのまゆひらけたる(兼盛集)「三

千とせよひらくるも、此花ざりあまたの春の君のまごみん(万)九、此を

ひらきて見てばもとのと家のあらむと玉くけすこゝひらくよ

○ひらけ(古)序この歌あめつちのひらけそとまりけると泥よりいせきよけり(能

宣集) 圓融院の御扇奉らせ給ふ梅花ひらけたる哥有けるよ書て奉るべき哥と大

入道殿のめい侍りければ「君が世よあてもあるるな雪のうちよなやひらけたる梅

の花がさ(相摸集)はて「いひりけいも、ことながら桃の花みなひらけぬる人をと

るるな○コレハ相摸箱根權現二百首ヨミテ奉レルナ僧ノミテ其百首ノ題ニテ返シ

ノゴトクヨメル哥ヲノセタル也、ことハ百首ノ事也(山家)上「初をかれひら

けそとむる梢よりをさえて風のわたるなるるか

**補**ひらくび平首(著聞)十、おのが馬の手繩おもがひをおいそづいてひらくびをうち

てなり

ひらまつ(兼盛集)ひら松のありけるをみて「とゝをへてたけもかそらぬひら松の

あやいやいで終も見てゝがさ

ひらけさ(源)初花ののりよひらけさいつ、

ひらて(古事記)中、四亦著及比羅傳多作(釋日本紀)云葉盤栢葉盛物也(相摸集)早夏

「ふたうたよとが氏神をいのるるなこのて栢のひらてたよきて(夫)七、行家「神山の

かゝそれひらて打た、泥みよを忍いのる月の來よけり







しらぎをりいけかる云々

びんかうさ空穂上二、一院御文まこと御ゆけ侍らばまゐりてとおもう

給ふるを例あらぬことからをびんなくや侍らんとある御へんどうけ給そりぬ同

菊の宴上七、此きんたちのさふらひ給へんとこそ似つりたしからめさと住し給え

んよひびんかうこそあらめ同藏開中ノ六。詞。猶まうで、申されよりこゝお

の何事をり大將いとびんかきこといりて御文なくてのどて御硯紙などとりま

りかひ給へ落く三、猶もやとたらせ給ひねさらきばあそびんかきさまおぞ

したらんとかぎりなくおもひ給へ云後戀三、りりそめある所侍りける女心り

りよける男のこゝよてのりくびんなき所あれば心さしありながらなんえ立よら

ぬといへりければ所をりへて待けるよみえざりければ女落窪一、帯刀こたびたよ

御返りなくひびんなりなん今たゞ相おせり源帝木七、四十人目忘れらん

所おびんかきふるまひやあらぬ同胡蝶三、さきと、うあされがまし今やう

の人のびんない事いであとせる同若菜下、五人々見奉りあつらひて御せうそこ

聞えさせんと聞ゆるをいとびんかきこと、せい給ひて枕十八、すこし中あしく

かりたる比文おこせたりびんかきこと侍るとも猶ちぎり聞えし事のすてたままで

よそよてもさぞかとい見給へといひたり源夕七、十二條の院まむりへてんもい

きこえありてびんかりるべき事ありともさるべきよこそ同六、かぐとこも

り侍らんもびんないことあり宇治拾十一、帝聞しめしあまりて此をのこさゆのこ

れをりく笑ふびんなき事也云々殿上人ともかく起請をやぶりつるいとびんなき

ことありとて云々源手習四、よからぬ人の物をびんなくいひかゝ侍る時よ佛法

のきせとかり侍ることありと云々長秋詠藻中、忍びける事ありて逢がたかりける

女のもよ夜ふけていきたりけるよ今夜のびんかきよいひければ曉ちりくある

まで門の外ありて云宇治拾五、おほやの御前よてそをさきかき出してふぐり

あぶらんかきさふらそんひんかくや候べりらん源五のな下、おそくひびんかり

らんとたゞうちおもひけるまゝ同下、院の御賀まづおそやけよりせさせたま

ふ事どもいとちたれよさしあひてのびんかくおぞされてそこしそとすてしたま

ふ同上、五、ひるかどけさやりまわたらんもびんなきを夜のまゝ忍びてとかんおも

ひ侍る宇治拾十四、今より後老法師とてああおづりそいとびんないことなりとい

ひてきたりける著聞六、御所よてもル七、つううまつられ候へをかつひびん

きりたも候更級日記おひたてまつりてきたるよびんなく人おひてくらんとおも

源氏物語 卷之五十四 十八



ひて(源 夕かほ)六 びんなくかるト、しきこと、もおもをりへりびつ、(同) 卅  
 此院もりなど聞せんこといどびんかりるべ(空穂 國讓)上ノ一、いどか  
 くびんかきを日しろ侍るところもの、さどいあせせり(源 夢の浮橋)九さて  
 いどびんか死しるべとはおぞしともうのさきもどより給へ(同) 十うそのをらよ  
 てもの、たらんことをおぞしんかりるべけれとおもひとづらひて(同) 十のどの  
 この子をやがてやらむとおぞしけれとめおぞくてびんかけれ(同) 十 手習 十か  
 ころとてある所、久しうおせせんもびんかしてりへる(同) 卅 いたうを死がま  
 からむもさねがまびんか(枕) 十一、きよらかるさうぞくのおりものうすものあと  
 いまのみなさをあめれいまやうよ又さまよ死人のきたまそんいどびんかき物ぞ  
 かり(源 うき舟) 三 六十 びんか死事もあらばおもくりんたうせしめ給べきよかんお  
 せせと侍つれば(宇治拾) 十侍りへりきてめ候へびんなくさふらふと申て恐  
 申候なりといへ(同) 廿 二 そのところよ入ふさんことびんかりけれ(同)  
 びなけ(蜻蛉日記) 上、けふさよのとりあとおもひつるをびなけなりつれば  
 びんな(落くほ) 三 此家のかれ侍らばこそ領侍らめ 云 今迄かくなんとも忘れ  
 せべらざりけるいたぐ頼をびんなと思ひおきたるよ(空穂 樓の上) 廿 犬宮御車

ながらみんこかたよとの給へれとみこたちのおせれるよびんなとてき、給せ  
(蜻蛉日記) 上、此よて猶三日さふらひ給ふ事いとびんなかど定むるを(落窪) 三 殿  
 をびんか(一)とも思ひ聞えざりしうとも北の方のなさけなく覺え侍りし(云々)  
(同) 三 殿のゑと奉れとの給ふよ青うて出給せびんか(一)とてうとたち盃参り給  
 へとてかゑるト、あひるよ忍びまどひぬ(源 夕かほ) 卅 七 びんなと思ふべけれと今  
 ひとさびかのか死からを見ざらん(同) わか紫 五十 おいらりよとたさんをびんか  
 いなぞいいそで心ままりせてゐてさふらりしつるなめりと(榮 日蔭) 卅 殿 びんか  
 一のたまいせんよもりをりりのみよてのくるしうやのおぞえん(落くほ) 一 う  
 ろみといふ名びんかしてあこぎとつけ給ひき  
 ○びな(一)(狭) 卅 一 下 志 さ い の い り で り 心 を ら ぬ こ と か れ ば び な か し と お ぞ さ ら ん  
(同) 同 いどろく思ふべさ身の布有さまならねびななよのあらせ心ちの例  
 ならせのみもとよりありし(云々) (落窪) 一身よびかきいどみぐるしきをいと  
 あやしきこと(同) あやしうびかしとき、しとよりのとおぞし(和泉物) びなき事  
 もいでまうできかん  
 ○びかき所(蜻蛉日記) 下、さかんと告聞ゆとなんおもひしとびなき所(モ) モ 也



またかたう覚えしりばあん

びんなき所(枕)十二哥云々びんなき所よて人ノ物をいひけるよ

びんなき人(枕)九ノ布をどのよびんなき人なんありつきま笠さへせて出けるとい

ひ出たるを云々

ひんぐう(平家物)行文考天下第一のひんぐうならん僧を導師おもちるや(信解

品)時貧窮子遊諸聚落經歷國邑

びんぐき(狹)四ノ中えぞーのひたひもそこあがりびんぐきおさけかけよて云々

(源末つむ)御びんぐきのおさけかけをつくらひ給ふ(同紅葉賀)七いさけなく

うちふくたみたまへるびんぐきあされたるうちだすたよて

びんあるどころ(うつや國讓)下僧ぐうの方の君たちいつらひ給ふさらぬいさふ

らひのをのこともつりまつるもの内よびんある所をなん僧坊よける

びんあーき(玉葉)雜びんあーくて御對面なりけれ云々二條院

備びんぎ便宜(落くち)一なるびんぎつけられよ

ひむー(仁德紀)夏むーのひむーのころもトヨミ玉ヘルひむーカ飛蛾トテ灯ニ入

テ身ヲ亡ス虫ニテ蛾ノ中ノ一種也

ひうち(火打)後(後)みちのくよへまかりける人ひうちをつりまはとて書付ける

「をりくようちてたく火れけふりあらさ心さけをのべとぞおもふ(貫之集)

友たちよ火打おをへてつりまける○火打あぐてたれものくもへてやる也(新

千)離朱雀院の御時藤原親盛がから物の使まかりけるお金の火うちよ沈のそく

ち云々敦忠哥(古事記)中ノ火打有其裏

ひうちさ鳥の羽さきよ長き羽あり火打の(つれく)六十藤のさけの火うち羽のた

けよくらべて死りて牛の角のやうおたむべ

ひのいへ火の家(空穗 嵯峨院)卅「いづとせー身たおをかれぬ火の家を君水の尾お

いりでもむらん(拾)哀傷よみひ(朗)一世中よ牛れ車のおかりせをおもひの家をい

りでいでまー火宅(法華經)三界無安猶如火宅衆苦充滿甚可怖畏(譬喻品)爲求牛車

出於火宅

ひのよそひ(源胡蝶)七やがてまきでやすみ所とりつひのよそひまかへ給ふ人々

もおなり

ひのりみ火ノ神 ○信友云百寮和哥拔文ニ火の神よとられ云々前キニ在シ此スデノ

書ノ火災ニアヒタルヲナイヘル文也此哥作者不分明大ヨソ天文ノコロノ人ナルベ



シ歌詞等ノ口氣ヲモテオシハカリテカクイフ不衣開大天文ノコト人々ハ  
ひのさめ一年中行事哥合入道大「けふぞける年のふよくるをのひいけの  
水のふりきめぐみを〇こそこの氷ををさめて所々のためしをけふのせちゑのついで  
は奏聞をるなりあつさうすさいりよどの寸法は侍るなどこまりは奏して其例とて  
近頃ハ石おとを奉るおや氷池とい水を氷らにいけ也

補ひのたてひのよこ万一ノ日日經乃大御門云々日緯乃大御門云々

ひのねきみ土御門院御集「冬ぐれの草をよさわぐひのほきみきのふいけふまな  
るぞぞとなき

ひのうち拾總二爲基「日のうちよ物をふたゝびおもふりなとくあけぬるとおそく、  
るゝと

ひのおま狭二十九上常よりもあつき晝つりゝ御帳のりゝびらをこゝゆひあけて  
ゆりのうへよてひのおまゝをりりをしきて紅のうをものゝひとへをゞの御そり  
まをりりを奉りて榮月の宴八南おもてのひのおまゝの方まかゝづきす奉らせ  
給ひて

ひのくれ夫十二行家「日のくれよいたた此小野をゆきしらばさをしりおきつつまを

こふらん万十四十一「比能具禮爾うんひの山をこゆる日のせかのが袖もさやよふ  
ら同十二四十二「とよ國のさく此あうたまゆさくらゝ日のくれぬれば妹をいぞ  
おもふ

ひのこと火事右京大夫集二十五せちのそと内裏はちりき火のことありて是でよあ  
ぶかりりゝりバ

補ひのこ榮月の宴廿六所葬香のこゝ火のこゝおそみあるとさかりけり

ひのあ源末摘四冊むひたるらうのうへもかくあされたればひのあ不となく  
さゝ入て

ひのささぎ靖蛉日記中下ちりう火のささぎをとおろさささぎをるそとよいとゝく  
みえたり

ひのさうぞく枕十一五ひとへのひのさうぞく紅のひとへ宇治拾十二十六ひの装束う  
るそとくゝさる人の太刀をき笏とりて云々

補ひのめ万二神風のいぶ死まどとと天雲を日の目毛不令見とこやまよおそひた  
まひて

ひのひりり伊勢集ある所あみりとふたりおそしまゝけりとり「日のひりりさ



経てませば紫のくもふたへ今やなるらん

ひのもと(源 薄雲)廿七ひのもとよのさらは御覧とらうところなり(拾)兼盛「ひのも

とふさける櫻の色をれば人の國よもあらしとぞおもふ

ひく〇車(源 空蟬)三とが車まであてたてまつる云々ひと見ぬ方よりひきいれてお

ろしたてまつる駒(同 玉葛)十馬よついつひりせていみづく志のびやつたれど

裾(同 紅葉賀)廿ものそを引おどろくたまへれば(同 末摘)廿うちきれそまた

まりてひりれたるをぞ一尺計あまりたらんとゆ(暮 更科日記)二そたれりけまく

あとひきたり弓(万)十一「みくさかる志なのま弓我ひりさうま人さびていなと

いもんりも(源 東屋)四弓をかんいとよくひきたる琴琵琶(同 末つじ)九御おとめ

て内よもこの方よ心えたる人々あひりせ給ふ中務の君のわざとびそひひけど云々

松(同 初音)四おまへの山此小松ひきあそぶ(拾)賀のふ「めづらしれちよのまどめ

の子日よのまづけふをこそひくべりりけれみあれ(夫)七かもの祭の中此日みあれ

引とて順「これ引んみあれよつけていのることあるくそまづきこえける(同)

行家「みあれひく時のきよけりけふもりもかつらの山よあふひとるらん(新)

後(神祇 爲氏)「神たよもとがみちまもれみしめ繩よの人とは引よよるともあやめ(詞)

花(雜上 致經)「君ひりせかりあまーりばあやめ草いりある糸をりけふのりけま(續後)

撰(雜上 知家)「身ひりくてもうたぬの池此あやめ草ひく人もなき糸こそつたせね(月詣)

下(雜)「そのこまもすさめぬあやめみかくれてひく人もなき糸こそたえせね

ひくろ(長門平家)十九若君旅よ出給ひたるゑるとおやえて日くろみしてそこ

いおもやせて見え給ふ

ひくりた(源 さかき)廿一我心ひくりさめて猶つらう心うとおや給ふをりおほ

りり(同 梅かえ)廿そくせのひく方あて(同 總角)八心此ひく方かんかそりりおもひ

そつるよあなるとまりぬべき物なりけれ

ひくれ(日暮 伊勢物)八十その木此もといたちてりへるよひくれよかりぬ

ひぐら(終日也 拾)秋長能「ひぐららよみきどもありぬ女郎花のべよやこよひ旅ね

志あま(伊勢物)四十「くれがた夏の日ぐらあがむればそのことなく物を

かか(夫)廿「きのうみれさひのうら此おきつもをさるの日ぐらあがむれば

ま(人)つれ(初)つれなるまよひぐらしすゞりよむりひて(窮恒集)「秋

のよ日ぐらあつるをよみなへよるやとまらん花の名たてよ(狹)四上御膝の上

まで日ぐらあまもり聞えさせ給ふ(拾員)上「ろうの上此秋の望月のをと春の千



里の日ぐらゝの空(續千) 春下、白河院御製 「嶺つゞきまふさくらをさぐものと折てやま  
つる春の日ぐらゝ(新千) 春上よみ 「さそへども君もこぼるの花みよとひとりぞま  
よふ春の日ぐらゝ(拾愚) 上 「をちりたや花よいをえて行駒のこぼるなるなが  
死日ぐらゝ(枕) 十一、十九 日暮し見るよめもたゆくくるう(玉葉) 春上 「も、ちどり聲  
のとりよてをちこちの山のかはめる春此日ぐらゝ(同) 春下、大宮前、太政大臣 「あすもこんけ  
ふも日ぐらゝみつれどもありぬの花のよをひかりけり(万代)(玉葉) 春下 「さくら  
花日ぐらゝ見つゝけふもまた月まつとよなりまけるりか(兼盛集) 「色よあける  
年よかければさくら花けふ日ぐらゝよをりてこそみれ

ひく、とたる聲(蜻蛉日記) 下 おとなくるもの、童さうぞくして髪をうけよてゆ  
くありみればありつる氷をひとへの袖まつゝともたりてくひゆくゆゑあるものよ  
やあらんとおもふはさよごがもろともある人物をいひりけたればひく、みたる聲  
よて丸をの給ふるといふをさくよぞ猶物なりけりとおもひぬるよ、ついでこれ  
くもぬ人のおもふことあらざるうといふまが、うさいふもの、そぞぬらそ  
める

ひく手(古) 戀四よみ 「おねぬさのひくてあまたよありぬればおもへどえこそたの  
人しらす

まざりけれ(源 東や) 卅一 ひくてあまたよとりやさうらなれどいとをくぞ侍るや  
どの給へそ

ひくての綱(源すま) 卅八 「心ありてひくてのつかれさゆさそバ打をたまやをまの  
うらかみ

ひく(著聞) 六十九 けひきりける男(宇治拾) 二ノ たり、らむひきからむもた  
けて(同) 卅 けひきりける衆の冠うへのきぬ 云々

ひく(續古) 戀五 「いざうらむなるみのうらみひく、これそやくも人のと  
ざりりよ(新拾) 雜上 「なみはがたまさでちとなく引、これなけれひるまよつも  
る、ら雪

ひ(和泉式部集) 下 ものへまうで、かへるよ火やといふものをつくるをあま  
れとおもひて歸りての夜月をみる「あまこれの月こそくもれひるみつるひやのけ  
ふりの今やたつらん

ひやうと(蜻蛉日記) 中 心もくる、ければ木丁さへたて、打ふを所あこ、よある  
人 大夫 ひやうとよよりきていふ撫子の種とらんと侍り、うと終もかくなりよけり  
云々(契沖云俗よヒヨットといふなり)



びやうぶ 屏風(拾) 春 圓融院御時三尺御屏風は花の木のもとに人々集りたる所兼盛

(著聞) 三ノ三爲輔 人の屏風のやうなるべきなり屏風のうるさうひきのべつれば

たふるゝかりひたをとりてさつればたふるゝことなり人のあまりようるさうか

りぬればえたもたせ 云々(源 寄生) 四 九十四尺の屏風を此さうしよをへてたてたるが

○こびやうぶ 小屏風(續千) 雜 小屏風硯箱を折句 折句。沓冠よおきて爲氏 「こまおたをひとせもみえせ

やへこりりうをなまな死のふりきみかそこ

ひやうてう 平調(源 紅葉賀) 十 さうの琴の中のを緒のさへがたれこそ所せられと

て平調よおしくたしてあらべ給ふ

びやうさ 病者(源 若菜) 下 二月比のいろくのびやうさをのみあつりひ心のいとま

なれりとよ(宇治拾) 四 僧ノ煩ニ病者かむらをそらで年月をおくりさる間ひけ

かみ銀針をたてたるやうよて鬼のこどく 云々

ひやうし 拍子(源 あか) 廿 我も時々ひやうしとりて聲うちをへ給ふを(補) (同 檣柱)

四 かつりしきよどのひやうしうちくをへてあそぶ

ひやうしあそせ(源 若菜) 下 九けふのひやうし合せよのこらそをめさんとして右の

おろい殿の三郎りんの君の御そらの兄君さうの笛左大將の御太郎横笛とふりせて

ひやくりよち 百箇日(玉葉) 雜 前大納言爲氏母の百ヶ日よ一品經すゝめ侍ける捧物

よ 云々親世哥

ひやくたん(源 鈴虫) 初 あみた佛けうしの菩薩おのゝびやくたんしてつくり奉り

たる

ひやくまんべん 百万遍(狹) 三 下宮此をどの佛の御前よのみさふらひ給ひて百万遍

の念佛申侍りたるお 云々

ひやくぶのろう(源 鈴虫) 初 名香よからの百ぶのかうをたれ給へり

びやくえ 白衣(發心集) 一 白衣ニテアシダサシハキナリケルマニ衣ナンドダニキ

ズ何地 凡ナク出テ(著聞) 十六 ほとりをそかちて小袖びやくえあて

ひやくさう 百姓(十訓抄) 二 周防の國の百姓の子かり(空穂 吹上) 下 九つたなれ百

さうの興ある筋をかん思よらき侍らん(大鏡) 七 むかりせういの民百姓(同) 八 諸國

の田民百姓いりよさむらん(著聞) 十七 百姓かりける法師

ひやくみ(空穂 俊隆) 二 四 百味をそなへたる飲食おかりぬ(大經) 上 末 百味飲食自

然盈満

ひやゝ(源 若紫) 九 雨をこし打をゝぎ山風ひやゝりお吹たるよ(同 夕るは) 四十 風



ひやゝりあるよ(同 総角)五十雨のひやゝり打そゝぎて秋をつるけしきのをさ  
よ(同)三卅あけくれのそとあやよくあきりこりて空はしきひやゝりあるよ(同  
浮ふね六廿風のおともいどあらまう霜ふりき曉おのけきぬくもひやゝりあな  
りたる心ちして

○ひやう(夫)卅六拾員上「うちそゝぐ秋のむら雨ひやりあて風よさらたつた  
のうた雲彌(散木)「秋来てハ風ひやりなるくれもあるをあつさしめらひむつり  
の世や

**補**ひやく(著聞)二十此柿のひやくとしてあさるをかいさぐるよ

ひやす馬チ(蜻蛉日記)中馬さも浦よ引おろしてひやしなど(うつろ 祭の使)七御馬

ともいけひひきさて、ひやし(夫)廿六安法法師「もち月此駒ひきたて、ひやしけるこ  
こやかつらの渡なるらん

ひま(御堂關白集)「ひまもなれ霞のまより梅花かさりりあてもいりて折けん(古)

上(六帖)菅万(朗詠)「谷風よどくる氷のひまをよと打いづる浪や春の初花(伊

勢物六十吹風よこが身をかさば玉すたれひまもとめつゝいるべれ物をかへ「と  
りどめぬ風よありとも玉簾たぐるささりひまもとむべき(源 空蟬)三此入つる

かういひまたさゝねバひま見ゆるよ(同 夕かほ)十くまを月りけひまおそりるい  
たや残りあくるもりきて(同 あふひ)六さうくの人をきひまをおもひ定めてみかさ  
一のけさるる中よ(同 紅葉賀)六宮のその頃まりで給ひぬれば例のひまもやどうか  
がひありき給ふをことあて(蜻蛉日記)中かくて其日をひままで又物いよなりぬ  
ときゝて(源 溥標)卅おとゞのひまある中あていりもてなと給さんと心ぐるく  
覺(同 わかぢ)下六日頃いさゝりひまみえ給へるを俄よかんかくおそいまはと  
て(同 あふひ)六御心ちもよろしきひまなり 云々(同 御法)十三の宮のあまたの御中

あいとをりけよてありき給ふを御心ちのひまよの前あす奉り給ひて人のきり  
ぬまよ(同 柏木)三 いさゝりひまありとて人々立さり給へるよとよ 云々(同 夕かほ)  
四十君のいさゝりひまありておそさるゝ時のめい出てつりひなど給へ(同 みの  
り)十けふそいとよく起る給ふめるも此御まへまでいこよなく御心もそれゝ  
けあめりりいと聞え給ふかさりりれひまあるをいとうれいとおもひ聞え給へる  
御けしきを見給ふよも

ひまかく(源 桐壺)八うへも御涙のひまかくながれおそいまを(落窪)一ふたりの  
むこのさうぞくいさゝりあるひまなくりれあひぬせ給へ(源 桐のほ)五あまた



の御方トををたさせ給ひつゝひまなき御まへわさりあ(同 若紫)五ひまなう出入つゝ(六帖)上「こもりえみひまなくうける萍のまかくぞ人のこひかりける(源柳)十池のひまなう氷れるあ(万)一十六ひまかくぞ雨のふりける云々(源あふひ)六物車ひまもあう立わたりたるあ(大利物)二ノ「君をおもひひまなきやと、思へどもこよひの雨のもらぬまぞなれ(源 手習)六十例のあぐさめの手習を行ひのひまよひ給ふ(同 をとめ)一折しゆくさの君参り給へりもいさゝりのひまもやと此でろのけうすのめき給ふかりけり

ひま(和名)二曾孫、爾雅云孫之子為曾孫、和名比々古(盛衰)一母の八十有余まなりけるまぐり行て此子あづけ奉る御ためよひひまぞあり

○ひまある(源 葵)卅八をこひまありつる袖ともうるすひひたりぬ(同 楨柱)十雪すこひまあり夜のふけぬらんりしとどさげがたまふのあらぞをのり聞えて

補(源 常夏)四うもべいといとよれ御中のむりよりさげまひまありけるま

ひまゆく駒(堀太)述懐「ひますぐる駒よりもときかけろふの世をたまはるいそぢの春あひひけるりな(夫)十三「きよみがたひまゆく駒のかげうすと秋あき波の秋は夕暮(夫)廿七後徳大寺左大臣「かへる春ひまれこまどめあふさりの關のらみづま

志を水かへ(同)同土御門院「朝でとよひまゆく駒をそやめつゝいりあるりたへ人のゆくらん(同)同季經卿「どめあへぬひま行こまといひながらいりあけゆく秋

の風をも(新古)冬隆季「あたらしきとや我身をとめくらんひまゆく駒まみちをまりせて(景行紀)四十然天命忽至隙駟難停(千載)雜中一條院「いりて我ひまゆく駒

を引どめて昔まかへる道をたづねん(拾玉)一「世をこたる心はあはれなくともひま行こまのあぢななの世や(禮記)三年三年之喪二十五月而畢若駟之過隙(史記)

魏豹 酈生説豹々謝曰人生一世間如白駒過隙耳○索隱曰莊子曰無異騏驎之馳過隙則謂馬也小顔曰白駒謂日影也隙壁隙也以言速疾若日影過壁隙也(莊子)比遊如白駒過

卻(説苑)建木篇 枯魚銜索幾何不蠹二親之壽忽如過隙(文選)劉孝標書、隙駟不留、李善曰墨子人之生平地上無幾何也譬之猶駟而過却古隙字也李周翰曰隙穴也駟馬馳而

過穴喻速也(新勅)雜三有房「すともなくひまゆく駒を見てもあはれひつゝのあゆみをぞおもふ

ひま(源 夕顔)七ここといおろしてけりひまよりみゆる火のひりりた

るよりけはほのりあされなり(同 はし姫)六御孫んせのひまより此きんたちをよてあそびやうくおよまけ給へ



ひませ 隔日(蜻蛉日記)中、さざとりさうくくしてひませなど打りよひされば  
(方丈記)ひと日ませ(十六夜日記)とくくくしてひませのやみやみませおこる事  
二さびよかりぬ(榮うらく)六、大りたよてひませなどの御使右近内侍さざりけ  
かくつたへ人よてさふらひける

ひけ 卑下(源紅梅)三、内よの中宮おとしまはいりさりの人りの御とひま  
らび聞えんさりとて思ひおどりひけせんもひかりるべし(同 蜻蛉)七、せさくをど  
なきやり戸口よよりの給へるかこそらいたくおやゆれささはがあまりひけして  
もあらでいとよ死ねどよ物かとも聞ゆ(同 わかち)九、心のみよもをさらせひけし  
て(同 梅かえ)六、ある人よもあらせやとひけし給へば(同 薄雲)四、又いたくひかせせ  
かどして(同 源わかち)上、うとからせおやうせまへてんやとひけし給をあまり  
かう打とけ給ふ御ゆるしもいりなればどうしろめたくこそあれ(同)同七、さるべき  
りたあひひけして(同)下、云々うせもの、さうかけなる引りけてことさらひけし  
されど

ひけ 鬚(神代紀)上、鬚鬚(源柏木)九、いたうやせおとろへて御ひけなせもどりつく  
ろひ給えねばおけりて

補ひけをそらひ(宇治拾)十五、牙をかみひけをそらしてゐたり

ひけがち(源松風)四、ひけがちよつなよくき顔を鼻なせ打ありめつ、さちぶきい  
へば

ひけこ(枕)五、かまめりしき物、ひけこのをりうをめたる五葉の枝よつけたる(注)  
ひけこノ竹ヲ畫ノ具ナドニテ染テ五葉ノ松ニユヒツケシ也(拾)雜、亭子院京極の  
やを所よとたらせ給ひて弓御らんとてりけもの出させ給ひけるよひけこよ花をこ  
れ入てさくらをとぐらよして山をけをうぐひせよむせびりめて 云々(源とつね)四  
さざとがましくあつめたるひけこどもひこりさかど奉れ給へり(同 浮ふね)五、  
どり此うすやうなるつゝみ文の大きやりあるよちひさだひけこを小松よつけたる

補(赤染集)正月七日ひけこよこりかを入てやるとて(中務集)廿、御賀して正月七日  
ひけこよわりかいて少將御つりひよて

ひふり(源あらし)四、地のそこどなるさりのひふりいりづちいづまらぬ事侍ら  
ざりき

ひこ(ひまこ)ノ所  
ひこ(ひまこ)ノ所

ひこ(ひまこ)ノ所  
ひこ(ひまこ)ノ所

ひこ(ひまこ)ノ所  
ひこ(ひまこ)ノ所

ひこ(ひまこ)ノ所  
ひこ(ひまこ)ノ所



ろおこたりがたくものせらるゝを(同)八これみつ日頃おりて参れり(玉葉)夏順  
「夕立のなごりたよりれおたづと日ころもたぬかそづなくなり(同)戀四よみ  
「明くれて日ころへおけり卯花のうた世の中よあがめせま(同)同小馬「いと  
どしく日ころへゆけはうの花れうきよつけてやわをれそてぬる  
ひころおろく(源うき舟)四十雨ふりやまで日頃おろくなる頃いと山ちおろくた  
えて

ひこそえ(新古)春上好忠「あらをたれこそこのふるねのふる蓬今のさるべとひこそえよ  
けり(堀次)「みこたせばやま田のひつちひこそえてそよいづるそよなりよける  
りあ

ひこぞ(源東や)卅あまの川をこたりてもかゝるひこぞの光をこそまちつけさ  
せめ

ひこづらひ(古事記)上わがさゝせれば比許豆良比(万)十三引豆良比ありなみま  
れさいひづらひありなみまれど

ひでんぎ(源梅かえ)初あやひでんぎともなご今のよのものよ似ぎ(細)金襴などの  
類也(河)緋金錦金を織付たる錦也(明)被今綺と書り

ひこどろふ(源わかな)上ノ猫はまたよく人おもなつらぬよやつないとなぐつれ  
たりけるをものよひきりけまつそれおけるをよけんといこどろふほどよみれのを  
さいとあらそひひきあけられたるを(同)朝のは三十やうのいといたうさびよけれ  
ばありや云や、ひさしくひこどろひあけていり給ふ(夫)六俊頼「いなゝらびいひも  
そなたでもちつゝトやよりけたるひこどろへとや〇引ハルナリ(源夕きり)廿八  
をいみかろよもひこどろひ給そねバ(同)卅ちひささちをひかゝりひきころへバ  
(長門平家)十四四むねどの人々皆さいを引ぐ給へども士どもいされみひきト  
ろふよ及ばねばみなみやこよとめおさくバ(補)狭上一ノあなむつろあつく侍  
るよとひこどろひ給へる御あそびいとをろく

ひえ(源夕霧)卅よそりよきえいりてたゞひえよひえいり給ふ(拾)維下「老そて、  
雪の山をばいたゞけとーもと見るおぞ身のひえよける(源ゆ顔)廿九そひふてや  
やとおそろり給へどひえおひえいりて云々

ひえ(稗)射恒集の山「夏からぬ草とりろへうろゑ田よひえのやまぞもおひよ  
けるろか

ひえどり(著聞)廿おもなぐといふ鶴のありけるを(同)六件の僧ひえどりをりひ



けり

ひえり(源あふひ)四十けい愛敬のそとめハ日えりしてきこしめはべきことよこそ

ひあやふ(源夕顔)廿八火あやふといふくあづりりがさう一のりたへいぬるか

り(本朝文粹)一 夜行翁夜之警火舊府中呼曰火危彼誰何

ひあひ(著聞)廿一其庭は長居めが候ぞ貴殿と手合をしてこゝろみそやと申也云々

重忠存外けい思ひていよくふりくかこまりていふ事を大將さればこそこれ

の身ながらもひあひの事にて候去ながらもわが所望此事ありと侍りけると

ひさ(古)戀五(六帖)五 一住よしのまつほどひさなりぬればあしたづのねよな

りぬ日ぞおれ(六帖)上五 一とひさは咲たるやど花みればむりこひさきものお

もひぞつく(同)上六 一おく山のいとすの苔のとひさみれさもありぬきみよあ

るりか(六帖)下六 一そともかくちりなんものをさくら花こらひさよもまたせつる

りな(新勅)賀よみ人 一月も日もかそりゆけどもひさよふる三室比山のとこ宮と

ころ(同)冬前(關白) 一くれやす死日數も雪もひさよふるみむろの山比松の下をれ(万)七

六ノ十 一かりくよかバやをけん君が目を見せひさならはすべなるべ

○(備)ひさ(拾)戀二 一あひ見ぞいいくひさよもあらねども年月のせとおもゆ

るりか

ひさ(源すま)五 ひさよす給へる御けい(新六)五 行家 一さりとしていさもあらま

の床れうちよひさをいたれていく夜ありつ(備)万(万)十四 一うちひさはみやこの

がせのやまとめのひさまくことよあをををらねか(同)五 云々人のひさのへとがま

くらりむ(うつ)樓の上 三大將ひさよを給ひてそ君のこよりの給へ

ひさをつき(源藤のうらは)廿五みそ一のひたり右あひさをつれてそうは

ひざりり(空穗祭の使)五 十あつきひざりりあの人々すみあど給ふ(散木)一 日さ

りりのあそびてゆりむかけもかまれ萩のら風たちあけり(とりかへ)十五 一そな

さへおそして日ざりりよいとあつくなりぬるようちのさたり給ひて云々

ひさりた(古)長哥 大みやあのとひさりたはひるよるをり申つかふとて(同)下(雜)かつ

らよ侍りける時云々伊勢 一久りたは中よおひたる里なればひりりをのみぞさのむ

べらある

ひさがきの灰(夫)六 俊頼 晚見藤花といへることを「むらさけあいくしそめて藤は

そな夕ひさがけのそひをさくらん(和名)廿五 比佐加木 似判可作染灰者也(同抄)

十四 杓灰焼杓木葉作之並入染用今按俗所謂椿灰等是也



ひさつき(つれく) 百二近衛どの着陣し給ひけると記ひさつきを忘れて(江次第)

一ノ時簡前掃部寮散膝突一枚爲嘗御酒所司座補(著聞) 三膝突をしりぬ無左右大外記めされけり云々まづひさつきをいれてめたりけり

ひさう 非常(空穂 國讓)中一さて宰相よわがひさうの時よあひみでやみぬべきりいりよおもひたるぞ(源浮舟) 六十さのこど記非常の事のさふらそんをばいりで

ううけ給えらぬやう侍らん(同 手習) 五浮舟ノ是の人かり更ノ非常のけいからぬものよあらきよりてとへ(同 少女) 八おそくいもとあるトひさうよそべりたうふ

(榮月の宴) 二非常の事どもおそいまさば東宮あれたれをりと御けしき給そり給へバ(神功紀) 六非常之兵將滅己國と有て非常をオモヒノホカト訓セタリ(遊仙窟)非

常厚重(注)常ナラヌナカシキヲモアラント也(枕) 廿五。 ナツノノ所ナツノ云出スト。 人々猶このことの給へひさうよをうしき事もこそあれといふを 人詞いざ

あらきさらバかたのまれをなどむつりければおそつりかーとおもひながら(ひさうあき) (源 帚木) 十みよさみがちよひさうなさいへとろトの云々○此ひさう

なきの詞五十四帖中此ノ外ニミエズ其外物語書ニモミエタルヲナシ按ニ非常なるト云詞ナルヲるトきト誤リテ今ノゴトクひさうなきト云ツタヘタルニヤ手習ニこ

れの人なりひさうのけいりらぬものよあらき枕七ニ猶此ことのたまへひさうよをうしき事もこそあれといふを少女ニおそくいもとあるトひさうよ侍りたうお無美相マダ貧相なきナドイヘル舊説合ガダシ

補ひさまづき(枕) 廿一たりひさまづきとかやいふるまひ御前の方あむりひて(源 東や) 廿こよなく見ゆる五位四位どもあひひさまづきさふらひて

ひさけ(枕) 九こよろよき物、ひさけのえれたふれふすもみよこそとゞまれ(宇治拾) 卅一かねの提の一斗をり入ぬべきよ二四あ入て(盛衰) 四十提絃を焼て手水

うけて進せよといひくさ云々の焼たる提絃をとりて云々(宇治拾) 十九さりなをいれよをちていまかた手あひさけよさけをいれて補(宇治拾) 七大なる銀

の提よ云々ひさけのもれみあされバ又ひさけよ入てもてまゐる(大鏡) 二小桶よちひさきひさけ具して

ひさぶと(宇治拾) 十三ひさぶとよいりめく(補)ひさで(宇治拾) 廿四ひさでのたねをひとつおとしておきたり云々秋よなるま、

あいみトくおそくおひろでりてなべてのひさをよもあき大よかりたり女悦けうトてさと隣の人よもくせとれどもくつ記せおそり云々をぐれて大きなる



七八七ひさでよせんとおもひて内あつりつけて置たり

ひさでをな(空穂 初秋)上ノ。角力ひさをかりざしなどいどめづらりなり(夫)六

散木高砂あて風のいたくふきければおきあひさをばかといへるもの、たちけるを見て 俊頼「ひさをなさけるけしきよそながらそのこゝろをくみてゐる哉

ひさめ(古事記)中、四於是零大氷雨打惑倭建命

ひさ一(万)十四「藤かみのさける春のよそふくせの志たよこひバひさしくもあらん(後)懸四よみ「とれそあとのめしこといまつたどのひさしかるべきなよこ

そありけれ(源 桐つは)八弘徽殿あ久しううへの御局よまらうのやり給をせ(同 帝木)卅 ひさしくをどへておたり給へるあ(同 空蟬)六 ひさしうみ給へまをしきよ

(同 葵)卅おとゞひさしうためらひ給ひて(同 玉葛)十むせめさもよまはれど云々

いとひさしきよおもひとづらひて(同 幻)八まろがさくらいさ死けりいりてひさし

くちらさど(同 帝木)廿みしらぬやうよてひさしきとたえをも

ひさし(源 権の本)廿東のひさしのくたりたる方あやつれておむするよ(弄)服者

ノ体本屋ニ居給ハヌ也(同 夕霧)十あさそりなるひさしの軒のそもなき心ちを

れば(同 帝木)卅。軒はノ萩ノひさしよぞおとどのこもりぬる云々(頼政集)上ノ「千

八。ナ小君詞

とせまでこれをみよとやきみぐ世のひさしよちりくまつたてるらん(源 桐つは)七

おむしまた殿のひんがしのひさしひがしむきよいとたて(大和物)四例のおま

し所よあらでひさしよおまし敷ておとどのこもりなどして云々くつての給へり

ける彼ひさしよあられたりしものいさながらありや(金葉)懸下前齋「あふこと此

ひさしよふけるあやめ草たゞりそめのつまどこをみれ

ひさし(空穂 國讓)卅下さぬ五十疋俵よいれて(源 若菜)上、六此ちり死みやこの四十寺

よさぬ四百疋をこりちてせさせ給ふ

○ひさゞぬ 疋絹(榮 駒鏡)十かづけものひさゞぬ給をす

ひさ馬(源 わかぢ)上、六御馬四十疋

ひさ今云ひ(落くる)二かの中納言との、少納言りくおちくすの君ともあらで弁の

きみぐひさよてまゐりたり

ひさ(万)十九まをらをれひさのまよくおなざりることちをさして○ヒキテ行シ

ひさいり 引入(源 夢浮橋)十いよくおくの方よ引いられて(同)九りほも引いられて

ふしたまへり(紫日記)なとりかならせしもおもよく、引入たらんがかこからん(源 夕きり)一 女むりり身をもてあはさまも所せうあそれあるべきものいなしも



の、あそれをもをりしき事をもみまらぬさまより引入りしづとなどそればかりつ  
なてりよおふるをえとくしきもつねなれよのつれとくをもなぐさむべきぞ(枕)  
八ノ人のいふさおにくき物をといひてひきいりより(枕)

ひきいり(源 ぬか紫)廿二ヶ御車よのせたてまつり給ひてみづからのひきいり  
て奉れり(同 あふひ)六あどろの云々いたう引入てそのりかる袖ぐち云々

ひきいる(源 帯木)廿八ヶおたけあひひてり不ひきいれつることを(同 盤)九さ  
よりて聞え給へたかほをひきいれて

ひきいれ(元服ノ時冠ヲメ)廿七ヶおとゞの御座御前  
かんるんの内大臣ぞおとしまける(源 かりつは)廿七ひきいれのおとゞの御座御前  
あり

ひきいれ(源 夕かほ)四ひきいれおりに給(著聞)廿二ヶえぞしをひきいれて(同)九ひ  
きいれえぞうししたる男

ひきいれ(語燈録)廿一ヶかねて精進も候まじひきいれもたゞのをりよて候べし(同)  
齋のさばをば屋の上よりあけ候べきりかまらけよどり候べきり我ひきいれの皿  
あどり候べきり

ひき入らる(枕)廿六ヶ殿のおとしませばねくたれのあさが不も時ならせや御らんせ  
んと引いらる

ひきいれ(源 桐つは)三楊貴妃のためしもひきいづべうなりゆく(同 澤標)四我心

のこりくいわけなきよまらせてさるさわねをさへひきいで(同)廿心よま寄せた  
る事ひきいたしつうまつる(同 桐壺)九人のみりそのためとまでひきいでさ  
めきなけけり

ひきとる(宇治拾)十一中納言を此法師ひきとれとの給へ(同)廿九ノ打べき人まう

けてされよ人ふたりひきとりて出きたるを見れば(ひきとられ)廿八あなたこなた  
おそむ人の子どもの云々物を取ちらしてそこなふをつねひきとられおとせ  
せられて

ひきとらつ(源 早蕨)初。アツリノ手いどあしうてうたのさざとがましく引を  
ちてぞかきたる(同 紅葉賀)廿立給ふをひりへて云々引をちて出給ふを(同 葵)九  
いとたへがたけよおぞして御をでもひきとらち給せ

ひきとこえ(枕)八三十あまりさりなる女のつやさうぞくかどよのあらでたゞ引



そこえたるが(同)十かそのおびのりたつきたるをどのるすがたよひきそこえてむらさねのさしぬきも雪よはえて

ひきそぎ(著聞)十二東國よてい山たちをい京都よてい強盗をい邊土よていひきそぎをい過候つる也

ひきざり(蜻蛉日記)上みるのひきざりのみどろくちぎりたるを(赤染集)大原少將入道うせ給ひしを御いみよこもりたる僧どものれうよひきざりとして奉れりし

ひきざりしてたもとかくとおもへども涙ぞまさるみるめさえては(朝野羣載)青苔曳干和布曳干(うつほ國讓)上いろくのをしき四してひきざりしたもものなどい

て(落窪)一かそらけそこ給へさていひきざりなどやのこりさるをこ給へといへむ(源夢の浮橋)十晝あなさひひきざり奉りたりつる返事(細)海草ナルベシ

ひきほす(万)九ノをりきつをあさをひきほす(補)ひきへたて(源椎の本)廿あたりをりくもてあい給へりし御をまひも大とことち

出いりこあたかなさひきへたてつ、ひきへぎ(引倍木(猿樂記)五めでたれそで口、衣のつまどものうちいたしとたしとる、みるよめでやぎてあみそともみよきがたうそがなりよもくれなるなでしこのひき

へぎなとりやまこたるよ、まちりうをみかへし、まぎくちむくさのりうなどのお

り物(榮 駒鏡)四關白殿の御下がさねのさく此ひへたかやまきめとまりたり

ひきとむ(源 帚木)三四十ゆるしたまひても又ひきとむめ給ひつ、(補)万(廿)七

れがてよとひきとむめたひしものを

ひきとり(榮 月の宴)十御門箏の御ことをぞいみどろあそをさしける此宣耀殿の女御

よからまさせ給ひければいとうつくしう引とり給へりけるを女御の御もらりらの

濟時の少將つねし御前よ出つ、さりけかうさしけるをよいみどろよく引とり給へりければ

ひきとる(狹)四下琴かどをいへ奉らせ給ふよいとさとくうつくしう引とらせ給ひつ、何事もそぐれて見所あるさまよおひ出給ひぬべきを

ひきとく(源 夢の浮橋)八あま君御ふみひきときてみせ奉る(同 常夏)廿御ふみとり

いる云々ひきとれて御らんせさ(枕)廿三御文の大納言どのとり給ひて殿よ奉らせ給へばひきときていとゆくりき文りか



齒固具又供御藥酒等高坏六本献之有餅鏡用近江

ひきぬく(源 手習)六きぬをひきぬがせんとすれば

ひきこかれ(源 末つむ)七やがて大殿もよらせ二條院もあらで引わりけるを

(同 玉葛)廿男女の頼むべき子どもも引わりれてなん

ひきこた(續世繼)六成道ノ事ヲゆきふりの御幸よひきこたれりぎぬをき給へり

とて

ひきこたれ(源 くてふ)三こなたりかたかすみあひさる梢どもよしきをひきこたせ

るよ

ひきわけの使(新古)雑中「さぐの山ちよの古道あと、めてまた露こくるもち月の

駒(公事根源)駒牽の條よ八月十日信濃の勅旨の牧の馬を奉る六十疋也もと

ひ十五日あて侍りしりども云々天皇南殿より出御なりて御馬を御覽せ云々公卿以下

次第よ御馬を給へる云々取のこしの御馬をバ引分の使とて次將をもて院東宮など

然るべき所々へまゐる

ひきりへ(源 夕顔)廿むねをかきさんとひきりへてみろくの世をぞかね給ふ(榮

わら水)五よろづみな春れこゝろつれて空のけしきもひきをへさまとゝお物けさや

りよめでたれよ(源 早藤)九山里ればそひ引りへてみその内こゝろよくすみかゝ

云々

ひきりへ(源 ゆふ顔)十六條こたりよもとけがさかりし御けしきをおもひけきこ

え給て後ひきりへ二なのみならんいとそしかり(同 まき柱)二たれもかくゆるし

初給へる事なればひけりへゆるさぬけしきをみせんも人のためいとそしうあい

なしとおぞし(浦松)二ひきりへしけさやりよをなれそむき聞えさせんも

ひきりたむ(宇治拾)十五この府生さわがせして引りよめてとろくとそなち

て弓さふして見やれば

ひきりく(源 さかき)五十今ぞやをら顔ひきかくしてとりくまぎらそを

ひきりけ(源 柏木)廿白きぬさものなつりうあよゝりなるをあまたかさねてふ

をまひきりけてふし給へり(同 總角)九ちぢの社をひきりけて行されかき事を

契りけん

ひきよがで(源 あふひ)七俄よいとくるしけし侍るをえひきよがでなん

ひきよ比 興(盛衰)六重盛ノ父ヲイサ小松殿の弟の殿原より向ていりよかやうの比

興の結構せられ候ぞやたとひ入道殿こそ老もうし給ひてあらぬふるまひありとも



今のおのゝこそ家門をもをさめ悪事をもかため申さるべきよ

ひきよけ(源さかき)七姫君をひきよけて此大将の君に聞えつけ給ひし御ころを

ひきよけ(源帯木)九およびひとつをひきよせてくひて侍りしを(同 澤標)十さうの

御ことひきよせてかきあせせささび給ひて

**引たる**、**枕**七身ぶるひをいかにふりくちこきをさへひきよれて

引さぐへ(源帯木)初まれよあながちあひきさぐへ心づくしある事を御心よおぞ

しとむるくせなんあやまくまで(同)卅うたふたけてひきたたへるりさまへとお

ぞさんいといほしきあるべし

引たつる(源あかし)七御手をとりにひきたて給ふ(同 夕きり)十さうどのあなたよ

りさはべきなりりけれをひきたてさして水のやうあななきおとほ

引さて(源夕きり)六やがて此人をひきたて、おしむりよいり給ふ

引さけ(源玉葛)卅おとよまらせ奉らんとおたれりつたへほのめりし給もん

いたづらよまき物し給ひしかむりよともりくもひきたせ給もん事こそい

罪かるませ給とめと聞ゆ

ひきつたへ(源あかし)十おあがし延喜の御手よりひきつたへること三代よなん

なり侍りぬる

ひきつれ(源すま)八引つれてあふひかさし、そのかみをおもへつらしかもの

みづがき(同 竹川)七右のおとよも御子供六人ながら引つれておそしり(頼基

集)「子日れる野べし小松を引つれてかへる山路お鶯をなく(玉葉集よの能宣とて入

契沖云り

ひきつゞき(源あふひ)六物見ひまもなうたちこたりたるおよそしうひきつゞき

て立煩ふ(源)七下九ひきつゞきあらそひ聞ゆるやうめて(同 橋姫)卅おろきし

死しのおつこえたるよ筆ひひきつゞきひきりて墨つた見所ありて書給ふ

ひきつゞき(源帯木)九我ちりらいりおしなほしひきつゞき所なく(同)十一

こめきてやのらりからん人をとくひきつゞきひていおとみざらん(顯宗紀)七

天皇次起自整衣帯(源うつ蟬)五ひきつゞきひをさめたるうもべをのみこそみ給へ

(同 浮舟)卅ひきつゞきふともおくうちとけたるさまを

ひきつゞき(引杖 宇治拾)十九かあたこさの門どもをさしまたしてかぎをとりおき

て侍どもひきつゞきしてつひちのくづれおどのある所よ立ふたがりてまもりけるを

ひきなす(右京大夫集)中宮の御りたへ内のうへわたらせ給へり御ひきをさすの



御せがさの○主上上皇ノ召サセ玉フ直衣也(禁秘抄)中引直衣有帶昔只引歟近代用帶  
前普通ノ直衣小短程ニ着ナリ

ひきおほす(源野分)廿二たらせ給ふとて人々打をよめは御木丁引直しまるらば

ひきおほす(源榎柱)卅なつりうひきからし給ひ爪音おもひいでられ給ふ(同  
少女)廿たゞおもあらでさぬのすそをひきからし給ふ(同わかし)卅近き木丁の紐よ

さうのことれひきからされたるも○宣長云馴ル、心

ひきらり(宇治拾)二たけひきらりある衆の云々

ひきむけ(源寄生)卅いたくをむき給へせしひてひきむけたまひつ、

ひきむせぶ(伊勢物)八十一枕とてくさ引むせぶこともせト秋のよとたあたのまれ  
なくよ

ひさうでりを(源夕のほ)廿ひさうでりし給へどなよくとして(同手習)卅御いら  
へせりひきこえ給へりあどひさうでりしつべくいふ

ひさる(源鈴虫)十左大辨式部大輔また人々ひきゐてさるべきかぎりまゐりたれば

(伊勢物)六十兄おと、友たちひきゐてなまそのりたあひけり(枕)廿八あどかく  
遅くとて引るてまゐるあ(同)十九其たりの家のむせめおんな、どひきゐてきて

ひきおほす(源わかぢ)十七日々よ物をひきのぶるやうおおよすけ給ふ

ひきおほす(源わかぢ)四十御木丁のりたひらひきおほしおまゝなごさ引つくる  
ふせりりよてあれば

ひきおこして(源東や)四十ひき起して奉らせ給ふ

ひきくもへ(源わかぢ)二十とれおほけよまなのよしきをひきくもへたるとみゆ  
るあ

ひきぐりて(竹取)末中將人々をひき具してかへりまゐりて(源葵)六遠き國々より  
めこを引ぐりつ、まうでくなるを(大和物)三故中務の宮の北のりたうせ給ひての

ちちひさねさんたちを引具して三條の右大臣どのよみ給ひけり(うつろ櫻の上)

上ノ左大殿のさんたちいとおほく引具してせんつうまつり給へり

ひきやる(源夕かほ)十一み奉りおくり給へとおせし御木丁ひきやりたれを(同  
き舟)四けよ、く、もかきてける哉とまづりて引やりつ(同わかな)上ノ御木丁

おもしどけかくひきやりつ、人けちりくよづれてぞみゆる

ひきやり(宇治拾)二たけひきやりよて中あすぐれて

補

ひきのけ(榮御賀)二つぎよ又すこしひきのけてうへに御れうよをひたり

ひきのぶる(源わかぢ)十七日々よ物をひきのぶるやうおおよすけ給ふ

ひきおほす(源わかぢ)四十御木丁のりたひらひきおほしおまゝなごさ引つくる  
ふせりりよてあれば

ひきおこして(源東や)四十ひき起して奉らせ給ふ

ひきくもへ(源わかぢ)二十とれおほけよまなのよしきをひきくもへたるとみゆ  
るあ

ひきぐりて(竹取)末中將人々をひき具してかへりまゐりて(源葵)六遠き國々より  
めこを引ぐりつ、まうでくなるを(大和物)三故中務の宮の北のりたうせ給ひての

ちちひさねさんたちを引具して三條の右大臣どのよみ給ひけり(うつろ櫻の上)

上ノ左大殿のさんたちいとおほく引具してせんつうまつり給へり

ひきやる(源夕かほ)十一み奉りおくり給へとおせし御木丁ひきやりたれを(同  
き舟)四けよ、く、もかきてける哉とまづりて引やりつ(同わかな)上ノ御木丁

おもしどけかくひきやりつ、人けちりくよづれてぞみゆる

ひきやり(宇治拾)二たけひきやりよて中あすぐれて

ひきやり(宇治拾)二たけひきやりよて中あすぐれて

ひきやり(宇治拾)二たけひきやりよて中あすぐれて



ひきやむ(源もみちの賀)廿ひきやむといいたくおもひとれたるけそひかり

ひきまさぐる(源わあき)下六さうのことなつりしくひきまさぐりておせけるけそ

ひも

補ひきまゆ(重之集)十一くむら此里のひきまゆひろひおきて君々八千世のきぬ

糸よせん(和名)十四獨賣和名比岐萬遊(金葉)戀下前齋一ゆくへかくかきこもるよぞ引ま

ゆのいとふ心比ほはあらる(後)戀四一引まゆ此かくふたをよりせまほしく

そこ死たきてなくを見せそや(月詣)雜下「いとそいとおもひこそいれひきまゆの

か死こもる身へくるりりけり(新續古)戀一六條一引まゆのいとかく身をもつ

ませのこひいさのみぞおけきならま

ひきませ(源)下七このりくすのりなる女たちの御中ひきませたらんあ

ひきこめ(源はし姫)卅三カナル詞ウかのこたりのかくいどうもれたる身ひきこ

めてやむべきけそひおも侍らね(同)末つむ卅ついたちの御よそひとてとざと侍

めるをそいたなうのえりへ侍らせひとりひきこめ侍らんも人の御ころたがひ

侍るべければ御らんせさせてこそいときこゆれば引こめられかんりらかりあま

い(同)あかり(九)こゝあうひきこめ給へりけるいと興ありなることりあ

ひきこい(榮見はてぬ夢)三山此るの中納言よておせけるよ小千代ぎみ宰相中將よ

ておせけるを攝政どのやまからせおせりてひきこい大納言よ奉らせ給ひつ

(源竹川)四兄ぎとたちよりひきこいいみどうかいつれ給ふ(同)桐つは(廿)あくる

年のとる坊定り給ふおもいとひきこさまほしうおせせ御うしろとせべき人もな

く(同)紅葉賀(卅)春宮の御よよて廿余年お成給へる女御を置奉りてひひきこい奉

り給ひがたきことなりういと

ひきて(うつ)祭の使(七)右近の中將少將ものふらひきてまゐりたり(同)八おと

と云々右近の右の馬づくりさひきてかぎりなくあそびて出給ふ(同)田嶋の村鳥(五)大

おどろ死たまひて宰相中將さちかんだちめみこたちひきてまゐり給ふ(うつ)國

讓(中)六父おとをそめて左のつりさ人宮人ひきてあけさりうちてよ一夜あそび

ありせ

ひきて(古)序よしの川をひきてよの中をうらみきつるよ

ひきでもの(源幻)終みこ大臣の御ひき出物よなくのろくともおとよなうおせし

まうけてとそ(宇治拾)七事やうくそてがたあなるよ引出物の時となりて(補)北

山抄(大)條次尊者牽出物馬二疋若尊者好鷹者馬一疋鷹一聯加犬



ひきあく(神代紀)十引舉ヒキヤク

ひきあく(源わかし)三文ノひきあくよりいとゞみぎたまさりぬべくりきくら

まへり(源わかし)二いうなればかくむをせられたるよりとてひきあけさ

ひきあけ(源浮舟)卅るべの内記云々いとつぎくひきあけかどしたるす

かたもをりかりけり(同空蟬)七もやの木丁のかたびらひきあけて(同末つむ)卅

かう引あけ給へり(同こてふ)七みを引あけて聞え給へ(同夕霧)十さうトを

おさへたまへるいとものをりなきりためなれどひきもあけ補源夕霧卅おま

このすこあがりたる所をころみ引あけ給へれば

ひきさがり(とりりへせや)四かんの君はこひきさがりて云々

補ひきさぐ(枕)八ふとも聞いれぬ手づら引さぐいで見るこをいとよく

けれ

ひきさけ(源幻)三よるの御とのあまをこれりれどあまたをおまのあさり

ひきさけつさふらいせ給ふ(同やとりき)九十を馬も引さけかど一つか

こまりつぞをる(同東や)卅さうのあなた一尺さりり引さけて屏風たてたり

(同総角)八十大キミノ例のさりしき女をら今いとゆし事と引さけ奉る

ひきさけ(源わか紫)四十少納言とめきこえんたなければよべぬひ御ぞど

もひきさけてみづからもよろしきぬれりへてのりぬ補枕五ノなぐびつもたる

ものを死かどひきさけてさづりよほりていぬるこをねさりりけれ(重之集)春

らびをる女りたみ引さけてあり(更科日記)たてまつり鏡を引さけて

ひき引着(源花の宴)十この御まへあこをいりけあもかくさせ給めとてつまど

のみをひき給へば(同のわき)廿あかがちまつまどのみずをひきて

ひきり(源もふきり)七十致仕詞おのづららおもふ所ものせらるらんものを女

のりく引さりなるもりへりていろくおをゆるこさ也(同)七十さればよいと急あ

もの給ふ本姓なりこのおとゞもとおとなくしうのさめたる所さはがよかく

いと引さりよをやい給へる人々あてめさまみトきリトなどひがくしきこと

さも出給ひつべきとおどろりれ給て(河)急ニ心ミジカキヤウナル風情カ引キリ

タマシヒトモイフナリ〇文丸云切ハナレガハキトシスギルカ(源楨柱)廿さう

トみのりひきりよさくしき心もなきものを

ひきせ(源總角)十御ぞひきせ奉り給ふよ



増補新編  
源氏物語  
卷之五十四

ひきゆるがー(源 晴蛉)五十けよとおもひささぎてきみをひきゆるがはべりめれば九

(枕)十九かたそらなる人をひきゆるがせば(同)八三ゆわーかりける物をあれ見せよ

そゝあと引ゆるがはふ(同)七七宮もとらひせ給ふをひきゆるがー奉りて十六

ひきゆがめ(枕)七おのが口をさへひきゆがめて七

ひきゆひ(源 夕かほ)十うをものゝもあざやうよ引ゆひたるこいつき二十

備ひきめ(著聞)十二その時腹巻きてひきめ一ちんどう一をとりて云々まづひ十七

さめもて海賊を射たるお云々ひきめ耳をひくうてとほりぬれさ

備ひきー低ひくーとしてひくの部よ出せれと古くひきーといへり例ひくーの部よ出せ

ひきーろふ(源 紅葉賀)廿源内侍ぬがトとまふをとりく引ーろふと云々頭八ノ所

中將一つゝむめる名やもりいでん引くそかくほころぶる中の衣よ(つれく)

百七十ほれたる貌かりらそきもとゞりさー出物もさあへぎいたきもちひれー

ろひてあぐるりいどりそがたのうーろて〇引ズルコトニイヘリ

ひきーろみ(空穂 藏開)上ノ二ことよ手一づゝひれ給ふそのねさらふいふべきよも四十六

あらかかくひきーろみてどが御ことこの内をさりとてさーいれ給へ八

ひきーのび(源 日あき)上ノひきーのびてれいのかく(同 あふひ)六いでやおのがど

ち引ーのびて見侍らんこそをえなりるべけき

ひきーゞめ(源 うき舟)九聲ひきーゞめかーこまりてものがたりーをるを(同行幸)

七おたしきほさよのその御いれをひきーゞめ給ひてこそいとふらひものー

給いめとなん

ひきひろけ(源 わあき)上ノ六をみのまじ屏風をひきひろけて(同 蓬生)七せめてなが

め給ふをりくゝひれひろけ給ふ(同 楨柱)廿文云々どるやくゝくりけなく給へ十四

りひきひろけて玉水のことなるやうよおやさるゝを(同 幻)廿まほまのえひきひろ

けねど備枕十九かうらいべりのたゝみの云々引ひろけて見れば十九

ひきー(續紀)廿五人人己比岐此人平立天我功成止念天(續紀)廿己我比岐婢企(新

千)誹諧仲綱「ひきーゝ一人のたりせのれり舟つあでこさるゝ身をいりよせん(堀次)

兼昌「梓弓ひきーゝたれもいのるらんかたこくふの雲の上人(落窪)二二條どの

まの日々ああらまろくになりまさる云々これりれよつきつゝひきーゝま參れば廿

余人をりりさふらふ(續紀)廿六天下政方君乃勅仁在手己可心乃比岐々々(空穂 櫻の

上)八みな人のひきーゝ思とまれてある身かれ八



ひきまの(源 松風)廿ひきまのびとをこんをりりふえども上手のかたりにて

**補**ひきまの神(貫之集)「ゆくけふもかへらん時も玉ぞこのひきまの神をいのれとぞおもふ

ひきまぐれて(源 東や)初いで引まぐれておもたゝしきほどよゝなしてゆみえよーがなど

ひきまを(源 ありし)十くこうりようといふ手をおるかぎり引すまゝ給へるよ

ひきまを(枕)一ノ。翁丸ノ志よなれば門の外より引すてつといへを

ひきまを(夫)卅二雅有「このたびのみてりへしけりてなれつゝひきまをたがふ文のう

まがき(枕)一、ありつるふみのむすびたるもよておみもいときたなけよもちあふ

くためてうへよひきたりつるすみさへきえたるをおこせたりけり(注)封シメナリ

トアリ(頼政集)下「たまづさよひきたるをみのたがひせさみけりどよよもなぐさみてまゝ

ひきまを(源 ぬ顔)十すみのまれうららんよ志をひひを給へば(同 わかあ)下ノ

このころにれ手をどらへてひきまをてさまあしくもせさせ給まぜ〇モノ、ケノツキタルコトナリ

ひゆる(冷 ひえ)ノ所ニモ出源 夕かほ廿をひふしてやゝとおどろけり給へど只ひえよひ

え入りていれのとくたえそてまけり云々ひえ入よたればけをひものうとくなりゆ

く(枕)七ノうちたるきぬもいとつめたふ扇もたる手此ひゆるもおおえ申(仲文

集)「ことわりやうたのさこそひえつらめ君よしくべきおもひかければ

ひめ(和名)十六和名比女或説云編糝、唐韻云編糝非米非粥之義也

〇とそひめ(枕)七ノみそひめのぬれたる(注)衣よひめのみりして張のこはくせんた

ひめがき(垣 方丈記)あそらなるひめ垣をりこひて園といひめて(同)十いと

ひめて(秘 源 繪合)八ころややくもとりいで給まぜいといたくひめて(同)十いと

いさうひめさせ給ふ

ひめぎみ(源 東や)八かりあたるをなんひめぎみとてりみいとかなうー給ふ

かると聞ゆ(同 帚木)十。頭中將わが妹のひめたみのこのさざめよかかひ給へり

おもへば(同 見か紫)卅こひめぎみのいとなさけなくうれものよおもひきこえ給へ

りーあ(榮 月の宴)四十。伊尹ノ女ヲ女ぎみたちあまたおそは大姫ぎみ内おまるらせ給

さんとして云々(同 花山)四東二條どのの猶いで此中姫ぎみを内お参らせん云々(源

東や)初守の子ともい云々此をらよも姫ぎみとつけてりーづくあり



ひめみや 姫宮(源若菜)上五。アカシ中宮對面一給ふついでみ紫詞 姫宮よ中のとあけて聞えん(同)上九。女三ノ姫宮のいとうつくしけり

○やま姫(古) 雜上「たちぬそぬ衣き一人もなきものをかよ山姫のぬのさらはらん伊勢

○さね姫(新勅) 春上(六帖)五「さね姫のをりかけさらはうすこの霞たちさる春好忠(新勅)なる(同)

の野へりか

○そま姫(夫) 廿五「秋風のふきでのそまの瀆姫の夜さむよかれや衣かさく祐舉

補 ひめも 桃(堀次)「春がけみ立ちくさなんみちれべのかきねよさけるひめも、の花

補 ひめもは(著聞) 十六ひめもをあそびありきて

ひみづ(加茂保憲女集)てる日よもさえぬ氷をもひみづといひてあつくといふとよ(源とこ夏)初おみきまありひみづめして(和名) 十六氷漿、四聲字苑云氷和名

膳夫經云立秋後不得領氷漿今按以氷入漿也

補 ひト 非時(榮つるの林) 廿御いみあさふらふ僧たち關白ををどめ奉りこのどのをらんたちめ受領かきをつくしてひトさせ給ふ(類聚雜例)御念佛御讀經及女院御讀經僧等被行非時

補 ひー 又(和名) 十三又初牙 兩岐鐵柄長六尺文選 云々讀比(三部抄)くろかねのひー

ひまづむねとまかことをさけ

ひトあ(宇治拾) 七此よまかくてあるべきややがて此御前よてひトあ、死かん

補 ひー 宇治拾 四干沙おひりれてるりよ湊へ出まけり

ひーと(万) 十三長哥 此とこのひーとあるまをなけ死つるりも(撰集抄) 六ノ此遊

女の哥の法文なるよてひーとおもひきため侍り(拾玉) 四ノ「いりよせん人もそら

そぬ夏れいけのひーとももの、おもひとられぬ(著聞) 十六、その、ち思ひわさる、

こともなくひーとこ、ろよか、りて日數をおくりたり(同) 十一座上よひーとる

たりける(同) 十九又四面のつひちの上よ瞿麥をひーとうゑられたりけれ(同)

二畠山左右のりたをひーとおさへて近づけ(同) 廿右の手してひーと、りてけり

補 ひト 佛(源) 二ふりさいそをれかりよぞひト入りたるたりける(同) 六

目蓮が佛よちりきひトりの身よて(同) 五をさまれる世よろ髪をもそぢを

出つりへけるをこそまことのひトりのひーけれ

○哥のひトりの(古) 柿本の人丸なん哥のひトりかりける

ひトりの御よ(日本紀竟宴歌)「そらみつよあまれいそふねくた、ひトりれみ



よを己たはとてあり

ひどり詞(源横笛)四 ことよをうきふしもなれひとりことさかれど(狭)二上いと

あまりあるひどり詞なの給むせそさしも聞え侍らぬ事ども侍るなり(源橋姫)四卅

おどろくしきひどり詞みむて、うがあとてさらひ給ふ

ひどり心(源推か本)廿 あざりのあまりまさりしれひとり心をあく、つらしとなん

おぞしける(同幻)三 かさりなき御ひとり心のふりくありゆくよつけても(同若菜)

上七 さるひどりこちよていどうれくおぞえければ(同)

ひどりさま(源はし姫)卅 いと世づらぬひどりさまよてちちしうぞあらんと年

頃の思あかづり侍りて

ひどりめ(つれく)一段 百七十 碁盤のそみよいしをたて、もどくま云々さげ手もどを

よくとてこなるひどりめをそぐおとどはたてるいかならぬあたる〇碁盤の

めをいふおや

ひる(散木)山よあそびあるれけるよちり此ひる聲のしければ「かせりけて

ひるをしりれこあきけは終らふこが身ぞとぞざりぬる

ひのうさむ(千載)夏 俊頼 「あざりせし水此みさびあどちられてひのうさ葉よ

かそづなくあり

ひいぐ(源行幸)三 足弱き車なぞわをおしひいがれあそれけあるもあり(夫)卅

家「山がつのへたてよひいぐ竹垣のこれくどけてもよをやそぎま(源あけまき)

七十むねもひいけておぞゆ(狭)二下むねひいけたるやうよて(枕)九六おろり心つ

れかしとおぞゆればこがさるをりもひしぎかへしてあるを(同)九廿六きらくしき

車かどをばえさしもおしひいぐはり(空穂祭の使)卅 かうふりれやれひいけて

也(赤染集)「むねひいけおけくなけきもありふればあくこちをるものとしらなん

〇補 ひさぐれ(撰集抄)此宗順の坊もちひさぐれたる内よなん侍り

〇補 ひさけ(同)家のひさけたる時

ひとやうひさうの所お

ひときもの(伊勢物)三 「おもひあらむ葎の宿あねもしなんひしきものよ袖を

つゝも補(山家)下 「あま人のいそくかへるひしきもの小あしそまぐりかうな

したゞみ(月清)四(夫)卅六 後京極 「松島やあき風さむき磯終りなあま此かるもをひら

きものよて(新續古) 綱 旅 「筈屋うたしなたれあはこよひりああま此るもをひ

しきものよて



ひーめく(宇治拾)十七いさりいもちひせんといひけるを云々をであいたーさる

さまよてひーめきあひたり(同)十一その日よかりぬれば道もさりあへむひーめき

あつまる(同)十九つぶりともいらでひーめくをどよ(枕)廿四かきよせてひとり

糸ん下であくるいとおもりたつりたかれをひしめくよおそろりせ給ひて(著聞)

十六ひーめ死いとなむ(同)十七さしもおくのかたよひーめきのーりつるおとな

ひどもまべてい死をもせせなりぬ(宇治拾)十八こちおーあちおーひしめきあひた

り(拾玉)五只今殿下御出とてひーめきー折ふー(宇治拾)三百人をりひーめきあ

つまりて(同)十七そでよあいたーたるさまよてひーめ死あひたり(同)同馬をより

とひーめきけるあひた云々かくひしめくをどよ

ひーく(宇治拾)十七今一度おこせりーと思ひ糸よきぬバひーくどたぐひよ

くふ音のーぬれば(つれく)下廿近づりまよーき人の上戸よてひーくとあれぬ

る又うれー

ひーく(宇治拾)廿一袴をぬぎてふどころをひろげてくの見給へといひてひー

ひーと(源夕のほ)廿一もやのきよたてたる屏風のりみこーりこのくまどー

くおやえ給ふもの、あーおとひーくどふみからーつーろよりくる心ちを

(同)総角廿風の音あらーりようちふくよむりかきさまなるーとみなどのひーく

とまたる、音よ(著聞)十六相撲をどりけりたがひよひーくととりくみて(同)

廿二つよくつりまれて地をりをひしどとま死けるが(宇治拾)九ノ天井をひしび

しとふみならーていりめくおそろけあるこゑあて

ひー日々(源柏木)廿八ひーよこたり給ひて(万)六ノ長哥月異日(日)雖見けふの

みよあきたらめやも

日ひとひ(土佐日記)上日ひとひ夜ひとよとくあそぶやうよて明あけり(同)下二

日雨風やまき日ひとひよすがらみ佛をいのる(源楨柱)十いどくるしかるべきあ

と日一日入給ひてりたらひ申給ふ(同)葵)四十日ひとひ入給ひておぐさめ聞え給へ

と(同)薄雲)廿日ひとひを死くら給ふ(和泉式部集)上「ゆふぐれのあそれのいた

くまさりけりひーとひもののおもひつれど

ひーる(和名)十九説文云蛾音蛾和名蠶作飛虫也

ひーありひーる(字鏡)蛾蠶也 安利比々留

ひーあ(榮御着裳)五ひーあ、どを作りたてたるのをりけなれどたをやりならねバ

口をしるめめでさうかきたれど物いそむうでりねばりひかー是のひーなともゑど



も見えさせ給ふ物りららうとけようつくしうかまめりう句せ給へれば(源若紫)廿ひ、おゝとささと屋でもつくりつゞけてもろともよあそびつゝこよか死ものおもひのまぎらそゝかり(同)廿ひ、なれとのゝみやづりへいとよく給ひて(狭)四下ひ、おおゝをゑたるやうまぢひさくうつくしけふてゐ給へるを(源)藤末(葉)十いとうつくしけよひ、なのやうなる御ありさまを(空穂)樓の上下ノ五あけぬれはくるゝまでいぬみやひなあそびゝまたふ(同)嵯峨院(八)五十女君云々いとをりいけよてひ、なあそびゝ給ふ

**籙**籙の假字契沖雜記ひ、いヒ、ときこゆる聲なハ鳴歟ト云り古言梯此説よれ  
るよや鳥の子のヒ、と鳴音もて名づくるなるべし云々或説お宇津保物語藤原「巢君」巻  
を出て終ぐらもゑらぬひか鳥もかぞやくれゆくひよとなくらんとあるよてヒヨと  
もヒ、ともかくものゆゑよヒ、ナと云ことこりいらるといへり玉勝間卷十ふるくひ  
るなどいへるひもトをひきていふかれバ假字ひひいなどかくべきをゐと書るひ  
たがへり(釋)日本紀卷廿比賣那素寐の釋よ私記の詞お比々奈遊とあり江次第卷十  
立太子の條比比奈と書る古例あれバひ、なとりくもわろきよもあらざるべしされ  
どひ、と鳴義とさたむると死ひひ、ない本也ひなと云り畧言めて末なるお鳥の子

をひな鳥なごいへれどひ、なと物よりけるをバいまた見あさらせふるきものよ  
も人形のたぐひすべてちひさくつくれる物をひ、なと書るひ末を本おせるお似た  
り云々又ひ、となく義とせる説を破て和名抄よ比奈とあるを本とせんと死ひ玉勝  
間の説の如くひもトをひきていふなればひいかの假字ならまゝおのれ愚かること  
ろよいづれをよいともさためがたゝなるたゝりある證のいでくるをまちてあき  
らめてん云々已上骨董集探要

**籙**ひ、かの車(中務集)中宮此ひ、なあそせおかそらのりたすままよ作れりひ、な  
の車のりた七月あぬり云々

**籙**ひ、なの裳(空穂)樓の上上ノ上をいけいでんの女御中宮おたてまつれたまふひ  
ひかのもああしてよて

ひ、かぎぬ(蜻蛉日記)下あるもの女神おのきぬぬひて奉ることをよりかれさゝ給へ  
とよりきてさゝめけバいで心みんりゝとてかとり此ひ、かぎぬ三つぬひたりゝと  
がひどもあかうぞり死たりけるひいなる心をへありけん神ぞゑるらんりゝ  
「白妙の衣の神よゆづりてんへたてぬ中おかへゝあすべく

ひ、なあそび(源紅葉賀)十いつゝりひ、なあそせゑてそゝさる給へり云々此間ニ  
籙アツ







までひゞりいとなみ給ふ(同)一五世中ひゞきゆすれる御いそぎかるを(同)タ  
かほ九十からうそのおとも云々かほのひゞきとも死いれ給を也

**ひゞき**評判(源竹川)十ナリきいた給へるけいさいとひゞきおそく死このゆ(同)桐つ

は六廿春宮の御元服南殿ありぎのよそほかり御ひゞきおとさせ  
給を也(榮布引)五六のんちめ殿上人のこりなくひゞきていらせたまひぬれば(同)

十此度のまして今一きを光をひてひゞきていらせ給ふ(源御法)五そこらつとひた  
るひゞきおどろくしきを(榮玉村菊)廿大嘗會とて又人々ひゞきのゝる(源み

とつくし)廿かゝりける御ひゞきをもあらで立出つらんをとおもひつゞくる(同  
をどめ)五のとやりならでりへらせ給ふひゞきよ

**補**ひゞき(拾愚)下「なく蟬も秋のひゞきこれゑたてゝいろよみ山の宿のもみぢを

(枕)九廿いりできりんとめをさまおきゐてまたる、郭公のあまたさへあるよやと  
きこゆるまでな死ひゞりせばいみじうめでと(補)後後二「み山よりひゞき死こ

ゆる日ぐらゝ此聲をこひし今もけぬべ(同)わか紫)十懺法の聲  
ひゞきあふ(源まの風)十松りせそなくひゞきあひたり(同)懺法の聲

山おろしあつきて聞えくるいとふとく瀧の音よひゞきあひたり

**びゞりう**(蜻蛉日記)下八月まつ布とよいそこよびゞりうもてなく給ふとり世よ

ふめる(源みゆき)廿今あても申文をとりつゞりびゞりうりきいたされよ

**びゞりく**(枕)七三。行成清ノ哥ヨモテオさやうの物よ哥よみしておこせ給へると  
おもひつるよびゞりくもいひたりつるりか女をこし我の思ひたるり哥よみかま

しくぞある(同)廿十一隨身たちてをやりよびゞり死をのこれ傘さしてをさのかた  
なる家のとより入りて(同)三十六いみづくびゞりくをりし君達も隨身な死い

あらと(補)宇治拾三藤大納言忠家といひける人いまた殿上人はおそしける時  
びゞりさいろこのみなりける

**ひも**(紐)允恭紀)八さゝらたよしきの臂毛(源帚木)八直衣をりりをとけかく

きなく給てひもなごも打てて、をひふ給へる御りけいとめでたく(六帖)五  
八「おく山れおけりよ立てまよふともいもがむをびり紐をとりめや(同)同「下紐

いどけてやつけぬ玉がこのををりもあらぬ空まわおれば〇此二首六帖可考契沖云  
紐いふたつある物なれば道まよふ時其紐をとれていづれの方おゆるんどうら

かふなるべ(補)貫之集)「明たてばまづさいひものいとよわみたえてあそをい  
といけるりひ



ひもろぎ(夫)廿一よみ「ひもろぎの神の心あうけてけりひられたかねもゆふかづ

らせり(袖中抄)うけはらしたかねに(神代紀)神籬(崇神紀)(万)十一「神をびよひもろ

ぎたて、いとへとも人の心いまもりあへぬりも(万畧解)十一下、(十三)檜室籬よて卷廿

庭中ノアスハノ神ニ小柴サシトヨメル如ク檜ノ葉モテ假ニ神室ノ籬ヲ作ルヲイヘ

リト(堀太)卯花俊頼「卯花も神のひもろぎとてけりとふさもたわよゆふりけてみゆ

(注)神祭ノ具ニクホテヒラテト柏葉ニテサシテ飯菜等ヲ入ル也云卯花ノ白キヲ

神ノ御供ノ色ニタトヘリ宗祇云ヒモロギハ神ニタムクル飯也(順集)卅「夏衣きて

こそまされ同トクハ神のひもろぎとてかへらん(古語拾遺)天津神籬古語比茂呂

伎(崇神紀)ニ神籬此云比芥呂岐(夫)卅四「みそをひいてながめこびぬる雪もよ神

のひもろぎとくるうれしき此哥ハ加茂ハ籠たるよ雪れいみとらふるよ心をそくて

うちながむるよと神の御おろしとてくがてをいれさるよよめると云〇これハ神

よ御け奉るをいふ(垂仁紀)十赤石玉一箇、日鏡一面、熊神籬一具

ひもどく(夫)四忠岑「春雨のよとふることも時よあへばひもどく花れつまと成たり

(源 蜻蛉)五十花のひもどくおまへの草むらをみわたし給ふも秋草(古)秋上よみ

「百草の花れひもどく秋の、おおもひとされん人あとがめそ(堀初)萩肥後「おめゆ

ひもどく(夫)廿一よみ「ひもろぎの神の心あうけてけりひられたかねもゆふかづ

らせり(袖中抄)うけはらしたかねに(神代紀)神籬(崇神紀)(万)十一「神をびよひもろ

ぎたて、いとへとも人の心いまもりあへぬりも(万畧解)十一下、(十三)檜室籬よて卷廿

庭中ノアスハノ神ニ小柴サシトヨメル如ク檜ノ葉モテ假ニ神室ノ籬ヲ作ルヲイヘ

リト(堀太)卯花俊頼「卯花も神のひもろぎとてけりとふさもたわよゆふりけてみゆ

(注)神祭ノ具ニクホテヒラテト柏葉ニテサシテ飯菜等ヲ入ル也云卯花ノ白キヲ

神ノ御供ノ色ニタトヘリ宗祇云ヒモロギハ神ニタムクル飯也(順集)卅「夏衣きて

こそまされ同トクハ神のひもろぎとてかへらん(古語拾遺)天津神籬古語比茂呂

伎(崇神紀)ニ神籬此云比芥呂岐(夫)卅四「みそをひいてながめこびぬる雪もよ神

のひもろぎとくるうれしき此哥ハ加茂ハ籠たるよ雪れいみとらふるよ心をそくて

うちながむるよと神の御おろしとてくがてをいれさるよよめると云〇これハ神

よ御け奉るをいふ(垂仁紀)十赤石玉一箇、日鏡一面、熊神籬一具

ひもどく(夫)四忠岑「春雨のよとふることも時よあへばひもどく花れつまと成たり

(源 蜻蛉)五十花のひもどくおまへの草むらをみわたし給ふも秋草(古)秋上よみ

「百草の花れひもどく秋の、おおもひとされん人あとがめそ(堀初)萩肥後「おめゆ

ひもどく(夫)廿一よみ「ひもろぎの神の心あうけてけりひられたかねもゆふかづ

らせり(袖中抄)うけはらしたかねに(神代紀)神籬(崇神紀)(万)十一「神をびよひもろ

ぎたて、いとへとも人の心いまもりあへぬりも(万畧解)十一下、(十三)檜室籬よて卷廿

庭中ノアスハノ神ニ小柴サシトヨメル如ク檜ノ葉モテ假ニ神室ノ籬ヲ作ルヲイヘ

リト(堀太)卯花俊頼「卯花も神のひもろぎとてけりとふさもたわよゆふりけてみゆ

(注)神祭ノ具ニクホテヒラテト柏葉ニテサシテ飯菜等ヲ入ル也云卯花ノ白キヲ



ひい秘(うつろ)樓の上)上<sup>四</sup>またたけ給とぬねの侍りい猶ひいたることやあ

また侍らん(同)藏開)中<sup>十四</sup>此御文ひせらるよと行政こそうけ給りつけたれことと

りなりけんり(同)中<sup>三</sup>何りいもんだなをさへひ侍らんとて云々(源わらな)

上<sup>二</sup>和琴のかのおとゞの第一はひ給ける御ことなり(狭)上<sup>三</sup>右のおとゞのひを

らん娘此御方よえこそならもざらめ(源梅枝)三<sup>い</sup>みとうひ給へ

ひすい(瀨松)四<sup>髪</sup>をこいなるがひをいかといふらんやうよ(源椎か本)四十

ろなりとりいふひをいたちて(盛衰)四十ひをいのかんざいにつけても今のなよ

りさせさせ給ふべきかれ御さまをうへさせ給へり

ひすま(榮初花)五十ひすま二人とのへたる姿ぞまどひたりと人よゑみた

り(和泉式部物語)ひすまわらわらして右近のさうよさ取せてきねとてやる

補ひすまのかせ(宇治拾)三<sup>二</sup>その人ひすまこれかこもていけんさいとりて

これよみせよといひけれ

ひすまめくもの(源玉葛)八<sup>十</sup>ひすまめくものふるけけ女ふたりを

りりとぞある

増補雅言集覽卷之五十四終



